農民兵士の生と死

北上市の二人の手紙より

関沢まゆみ

Records and Memories of the Life and Death of the Farmer-soldiers: Examples from Two Soldiers in Kitakami City

❶なぜ今か
❷小原清止さんの生と死
❸菅沼義平さんの生と死
❹生の知らせと死の知らせ
❺論　点
❻資料紹介

【論文要旨】

兵士の手紙については、書き手の兵士本人の声を聞くことが重視され、一方の受取り手の声についてはあまり注目されてこなかった傾向がある。本稿では民俗学の立場から、戦死、戦病死という異常なる兵士の大量の死をそれぞれの家族がどのように受けとめ受け入れていったのかについて考えていく一つの試みとして、岩手県北上市の二人の農民兵士の手紙を手がかりに、記録（手紙）、記憶と語り（聞き取り情報）、物（位牌や墓石などの死者の表象物）という三つの資料的側面から整理を行った。そして以下の四点を指摘することができた。第一に、二人の農民兵士の家族への手紙の特徴は、戦闘状況にはあまりふれずに家のことばかり心配して書いており、身体は戦地にいても心は常に故郷の家族の元にあったと考えられる。兵士にとっては手紙を出すことが、家族にとっては手紙がくることが、生存の知らせに他ならなかった。第二に、戦死、戦病死は伝統的な日本の農村社会においてはかつて経験したことのない死に方であった。公報による死の知らせ、村葬、家の葬儀などが慌だしく流れても家族は死をすぐには受け入れられず、妻は夫の死を自分で何とか確めようとする衝動に突き動かされていた。第三に、戦死、戦病死した夫の墓を作ることが夫の死の受容の方法の一つであり、老境においても墓とは生者と死者との関係性の「切断と接合の装置」に他ならぬと解読できた。第四に、戦死、戦病死者の位置づけの具体相において死者の表象物および「供養・慰霊・追悼」という宗教儀礼の重層性、重複性が注目された。死者に対する民俗儀礼としては、普通死の場合には伝統的に「供養」であり、異常死の場合には「慰霊」である。そして宗教色を排しながらその人物の死を悼む場合には「追悼」である。これら三種類は当然その意味も異なり、「供養」の場合には成仏を、「慰霊」の場合には神格化へ、と人格の喪失と異化が現象化するのに対して、「追悼」の場合には人格が維持され、悼まれつづける死として定位する、というそれぞれの死者の位置づけの方向力が作用する。戦死、戦病死の表象物および儀礼は、空間的重層性とともに宗教儀礼的重層性をも有している点にその特徴がある。

❶なぜ、今か—戦争体験者の記録—

現在、戦後五〇数年が過ぎ、戦争の直接体験者の高齢化が進んでいる。そのようななかで、観察や聞き取りを主な情報資料収集の方法とする民俗学にとっては、戦争と民俗に関する直接体験者からの情報収集は最終段階に入っている。

戦争体験の記録をその種類と記録された時期を基準に整理してみると、第一に戦争当時に書かれた手紙や葉書、手記や日記の類と、第二に戦後に書かれた体験記、思い出の記、部隊記の類に二分される。それら戦後になされた記録の場合には、大きく分けて、終戦直後、昭和三〇年代、戦後五〇年、の三つのピークがあり、二一世紀を迎えた今、もう一つの新しい動きがある。[1]そしてそれらは記録を行った本人によって刊行される場合と、本人以外の第三者によって編集され刊行される場合とに分けられる。[2]

まず、手記や日記の類ではたとえば兵士、学徒兵らによって書かれた手記や日記で、戦争直後の刊行の代表的なものとして一九四九年の『きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記—』[3]が有名である。一方、戦後五〇年の時期の刊行は大量で、塩川優一『軍医のビルマ日記』（一九九四年）[4]、後藤弘『征き死なん春の海—海軍飛行予備学生の日記—』（一九九四年）[5]、勝見明『戦場に残された日記』（一九九五年）[6]、岩丸定『1945年応召第二国民兵の手記』（一九九五年）[7]などがある。このうち『軍医のビルマ日記』は塩川優一（大正七年生まれ）が昭和一七年一一月から昭和二一年五月まで記録した日記のうち、現存する昭和一九年三月以降の主にビルマ戦場における軍医としての日々の記録を中心に執筆したものである。日記を公刊するその動機については、生還した塩川自身の歴史の証人であるという自覚と、戦死、戦病死した兵士への鎮魂の思いとがみとめられる。また勝見明『戦場に残された日記』は勝見（昭和二七年生まれ）がワシントン国立公文書館に残されていたガダルカナル島の戦闘で収集された複数の日本兵の日記の一部を紹介したものである。この日記については戦時中、軍事的情報の収集のためにドナルド・キーンが翻訳を行っていたことが知られているが、勝見は「戦史に残らない、もう一つの戦争の真実を記録に残すことは、無念の思いで散った日記の書き手たちへの鎮魂」（一二ページ）と考えてこれを刊行したという。

このような手記や日記の場合、記録を行った本人による刊行でも本人以外の人物による刊行でもその目的としては戦死者、戦病死者への追憶鎮魂と記録保存という二つの動機をみとめることができる。この追憶鎮魂と記録保存という衝動は、戦後になって戦争体験の記憶があらためて記録化され編集された体験記や部隊記の刊行においても同様にみとめられる。[8]

次に、出征兵士から故郷の家族や知人に宛てて送られた手紙を編集して刊行したものについてであるが、その早い例は一九六一年刊行の岩手県農村文化懇談会編『戦没農民兵士の手紙』[9]である。そして一九七〇年代から八〇年代には、岐阜県の「白鳥町戦没者の手紙」編集委員会編『白鳥町戦没者の手紙』[10]、菊池敬一『七〇〇〇通の軍事郵便—高橋峯次郎と農民兵士たち—』[11]、和我のペン編『農民兵士の声がきこえる』[12]、吉田とら、成子編『とうちゃんの軍事郵便』[13]などが刊行された。そして、戦後五〇年を機とした刊行としては、青木一『一日一信—戦地から妻への一六〇〇通の葉書』（一九九六年）[14]、岩崎稔『或る戦いの軌跡—岩崎昌治陣中書簡より—』（一九九五年）[15]、四条紫雷『ガ島に死すまで—一兵士の手紙より—』（一九九六年）[16]などがある。

一九六一年刊行の『戦没農民兵士の手紙』は、戦後一四年目の昭和三四（一九五九）年に岩手県農村文化懇談会という農民、農協職員、教

師、保健婦など農村の生活を自ら熟知している立場の人たちのグループが、主に岩手県下における戦没農民兵士の手紙を集め、それをまとめて、複数の兵士からの手紙とその兵士の略歴を付して紹介しているものである。あとがき、によれば、あえて解説を付さなかったのは主観的あるいは意図的ともとられるような手紙の紹介をするのではなく、あくまで私信として送られた農民兵士の言葉を聞こうと考えてのことだという。会では複数の兵士の手紙を熟読し、また読み手が同じ当時の農村の実態を知っていること、さらに同じ戦争体験をもつことなどから、それらの手紙には農耕への配慮や農耕にたずさわる家族への思いやりが書かれている一方、家族に心配をかけないようにと戦地でのつらいことについては書かれていないという点を指摘している。「滅私奉公」「軍務に精励」という言葉が多く用いられている点に注目し、さらに進級や送金、教育についての話題も多くみられることからは、故郷においては貧困と厳しい階層秩序のなかにあった農民兵士が軍隊ではじめて立身出世の道を見出した、という解読を行っている。そして、戦後一四年目という比較的早い時期に、戦没農民兵士の手紙を集め、編集し刊行しようとしたその動機については、まえがき、および、あとがきに、農家のあちこちで戦没者の遺影をみる、そのたびに「生きて帰れたわが身と思いくらべ、複雑な感情を抱かされて来た」こと、そして戦没者の犠牲のうえに自由で、民主的な現代があること、その戦没者たちの「たましい」に耳を傾ける必要がある、という強烈な現在自己存在への問いかけが示されている。そこには戦後の復興がなり、高度経済成長へと向かうこの時期の農村に生きる人々が、あらためて自己の現在を過去へと重ね合わせて戦没者の声を聞こうとしている姿がみとめられる。

一九九六年刊行の青木一『一日一信』は、青木自身が召集された昭和一五年二月七日から昭和二〇年二月一四日まで戦地から妻宛てに書いた一六〇〇通の葉書をのちに本人が翻刻したものであり、葉書の書き手自身がそれを行っていることと解説を付していない点が特徴である。青木は、まえがきで、「これは、私の遺書である」（一ページ）といい、出征が決まった時にこの葉書が途絶えた日を戦死の日と考えるように妻に言い残していったことを思い出している。そして「敗戦五〇年の反省として、この葉書を取り出して読むことにした」（二ページ）と、戦後五〇年目を節目に翻刻を始めた動機を記しているが、戦後五十年を経た青木が健常な老後を得ていたことによって、あらためて戦争当時の自分の手紙を自ら翻刻、刊行した点で貴重なものといえる。

一九九五年刊行の『或る戦いの軌跡』の著者は岩崎稔（昭和一九年生まれ）で、叔父にあたる岩崎昌治（明治四五年生まれ、昭和一三年中国上海にて戦死。陸軍工兵軍曹）が昭和一二年九月二日に充員召集が下令されて、中国上海に渡った後、昭和一三年六月九日に戦死するまでの手紙のほか、戦死後、昌治の家族にきた親戚、知人、戦友らからの手紙などが紹介されている。

一九九六年刊行の『ガ島に死すまで』の著者は四条紫雲（略歴不詳）という人物であるが、四条重孝（大正九年生まれ—昭和一七年一〇月二四日ガダルカナル島にて戦死。陸軍伍長）が昭和一六年四月一〇日に召集されて昭和一七年九月一四日にテガールを出港しソロモン諸島ガダルカナル島へ上陸そして戦死するまでの家族への手紙に加えて戦死後の遺族宛てに送られた慰めの手紙などが紹介されている。

この二冊についてみると次の三つの点で共通している。第一に、刊行の動機について、「今年は終戦後、既に五十年、今や日本は平和な時代が続いている[17]」という時代状況の認識が前提としてあり、しかし戦争の記憶を風化させてはならない、戦争の悲惨さを忘れてはならない、と主張する点で共通している。第二に、著者が手紙の書き手であった兵士の甥であるとか、手紙の受取り手であった兵士の両親をよく知っている人物であるというように、兵士やその家族と近い関係にある人物であると

いう点も共通している。第三に、手紙の紹介だけでなく、手紙が途絶えた戦死後についても、岩崎昌治の場合には「戦死とその後、葬儀等」、四条重孝の場合には「戦死公報」「村葬」「遺族への慰めの手紙」などの節が設けられている点も共通しており、遺族に保管されてきた記録やその周辺的事実の調査にもとづく著者による解説が付されている。

以上、手記や日記には出来事の記録という社会的な側面と同時に記録者の心情の記述という私的な側面があり、特定の誰かに読まれることよりも不特定多数の読み手を想定しているものといえようが、手紙や葉書の場合には家族や親戚、知人など相手を特定して書かれている。そして戦地における手記や日記の場合には、それを記述すること自体が自己存在の確認となり、手紙の場合にはその発送自体が自己生存の証明となっていたものと考えられる。

ここで注意されるのは、これまでの手紙の翻刻を中心とした多くの著書においては、手紙の書き手であった兵士の声を聞くことが重視され、またその手紙の記述から歴史事実を明らかにする試みがなされてきたが、一方の受け取り手の声については必ずしも十分な記述がなかった点である。[18] 日中戦争からアジア太平洋戦争へと戦況が拡大していくなかで、日本各地のほとんどすべての村落において戦死者および戦病死者を出したという事実は各村落社会の歴史において未曾有の事態であったが、その多くの家族は兵士の死をどのように知らされ、どのように受け止めていったのか。本稿ではとくにこの側面に注目することとし、今回の共同研究の共通のフィールドの一つであった岩手県北上市和賀町における軍事郵便を手がかりに、兵士の生と死、そして残された家族の心情についての分析を試みることとする。[19] 伝統的に祖父母の世代から継承されてきた家族の死と葬送、造墓とはまったく異なる、戦争という非常時にあって、最期の看取りを行うことができなかった遠く離れた戦地での兵士の死を、家族がどのように受け入れていったのか、それについて、記録（手紙）、記憶と語り（聞き取り情報）、物（位牌や墓石などの死者の表象物）、という三つの資料的側面から整理してみるのが本稿の主テーマである。

❷小原清止さんの生と死

（1）記録

横川目村の小原清止さん（明治三五年生まれ）は、昭和一二年九月一日「支那事変」に応召して歩兵第三十一連隊に配属され、半年後の昭和一三年三月三日に山西省臨汾県の野戦病院において戦病死した。当時三五歳であった。その当時の小原家の家族は家長の清止さん、父の命助さん、清止の妻コメさん、長男の博さん（大正一五年生まれ）、長女の節子さん（昭和五年生まれ）の五人であった。小原家は農業を営み、清止さんで一一代目の大本家であった。清止さんは大正一四年にコメさんと結婚し、昭和四年に父命助さんから家督を譲られたが、家は多額の借金をかかえて経済的には苦しい状況であったという。

清止さんが残した出征中の記録には、家族によって保管されてきた葉書と手紙合計二〇通がある。そして間接的な記録としては、妻のコメさん（明治四〇～平成九年）が戦後に語った記録「夢まで悲しい」[20]がある。

清止さんが出征後、妻宛てに書いた最初の手紙（2）（数字は⑥資料紹介―兵士の手紙―で全文を掲載してある。手紙の番号、句読点は適宜筆者が付す、以下同じ）と二通目の手紙（4）を紹介してみる。（2）は昭和一二年九月一〇日に弘前から出した手紙であり、（4）はその三日後の一三日に弘前から日本海側を汽車で移動して到着した広島から出した手紙である。

「今日十一日午前再度の軍装検査を終へ、午後から馬を汽車に積み

八時頃出発の予定です。去る四日には第二大隊機関銃隊の兵士が機関銃を積んだ車に引かれて重傷を負て翌日五日朝死んだそうです。又盛岡出身の今度召集兵歩兵伍長は九日夜首を切て自殺した者もあります。やはり馬は地方から徴発した馬故、使には仲々骨が折ます。幸に私の馬は年より馬故楽なもんです。子馬を残して来た馬も沢山あります。私は小行李隊と云ふ隊ですから相当キケンです。歩兵のすぐ後約九町位の処まで行て玉を歩兵の人達に渡すのですから相当にキケンです。併し皆様の心が私を守て下さるし亦沢山の御守札も貰て居るから私は絶対に安全です。此方に来てからも隊からは

図1　後列向かって右端が小原清止さん
昭和12年9月7日「日支事変記念」撮映（ママ）

明治神、岩手県からは県社八幡宮、宿からも一枚、家からの外に三枚も貰て居りますから決して心配することはありません。

部落の人達には出来る丈心尽くしをして決して恨まれ様なことをせずにね。父上も亦君も弱い体故充分注意して帰りを待て居れ。円治君にも頼んで居るが博の教育はしっかりやれ。父の居ない後で今までより成績の下る様なことせぬ様にしてくれ。

手紙を出す時は、弘前歩兵三十一連隊気附中村部隊井村隊特ム兵とかけ。兄弟達にも是れは知らして置け。十一日午後八時頃出発して二日半日位で広島に着く様です。途中は合ふことは出来ますまい。何れ体はくれぐれも大切にしなさい。又途中からも出します」

（2）（筆者註　円治は清止さんの従兄弟）。

次は、その三日後、広島から出した手紙である。

「父上様や皆様は変りありませんか。私は次の様な順序で広島にきて居ます。弘前を十一日午後八時五拾分発車でした。客車九ツ馬は約二十車位と思ひました。十一日は朝から雨降でした。頭からぬれて汽車に馬を積み終たのは八時半頃それから私と友方と二人で一ツ車の馬番をして行きました。客車よりは馬の方は楽にねることが出来たのでした。秋田駅に来た時思いがけなくルリに会たので皆様が黒沢尻に出たのを聞きました。秋田からたかよに電報を出させたので新潟県の糸魚川駅で六郎とたかよに合ふことが出来ました。会ふことが出来ぬだらうと思て居た。幸に此の駅で馬番の交代だったので自分の持物を持てる間にたかよに呼び出され全く夢の様でした。約二十分位停車あったので話が出来ました。時間になって別れる時には全く泣き出したくなったが沢山の兵隊の前で涙は見せられません。萬才の声は出せなかった。紙包を貰ふたが見るひまがなかったので今夜見たら千人針とキャラメルと仁丹でした。

次に汽車から見て行たのは越後の親シラズ子しらずを見て富山駅

に七時半に着きました。此処では婦人方が駅に出て御茶やら水やら薬（仁丹）をくれました。ツルガには前三時二十五分、米原に五時半、朝早く（ビワコ）を眺め乍ら朝食をして草津、大津、京都、神戸、明石と進んで行きました。アカシでは有名な瀬戸内海を見て姫路、広島に着いたのは午後六時四十五分でした。それから馬屋に馬を入れて休だのは十三日朝四時、一晩中馬を手入したり荷物の整理したりしたのです。今日は一日ゆっくり休めるのです。併し家に居れば手拭一本洗たことなかったが今ではシャッチやモモヒキを全部洗濯です。

此処まで来る間に田、畑、山、草刈、道を通る人、老も若きも女も歩ける位の子供さんまで皆手を上げ又日の丸の旗を振り乍ら萬才をせかんで私等を送てくれるのです。山形県を通る時、田の中で頭のはげた爺が草刈カマを振りまわし乍ら萬才をしてくれた時は全く涙が出ました。今頃は父も此んなにしてるのか思わるともう其処に居られず便所に行て暫く涙の止まるのをまって居ました。又小さい子供達や博位の奴等見ると何日も胸張りさけるようです。然し今は何と思ても仕方ありません。家を出る時云ふた如く僕の身をば決して心配せずに皆様の体を大切にして居て下さい。私は丁度浦島太郎の様に近所の方々がかわってしまふまで帰られないか知れません。特ム兵と云ふても兵隊さんの一人故に此の度は皆が見られない処遠い支那までも見ることが出来るのです。此れも皆天子様の御蔭と父母の恩とです。先日ルリに頼んだ金は旅費として隊から四円二十二銭貰ふたのと給料とを合せて五円送たのです。此の内からタカヨに出した電報料を何程か引かれたでしょう。私は大した金は不要だから何日でも月五六円位は送る考をして居ます。次に横川目駅を通る兵隊さんのある時は必ず必ず駅に出て見送りしなさい。知らない者でも多数の人達が出て居らるると元気が出るよ。きっとわするなよ。又出征兵の時も必ず出る様にね。

十四日頃出帆らしい。私に来る手紙には、三十一連隊気附中村部隊井村隊本部として下さい。手紙もあんまり出し苦しいから兄弟達に廻して見せて下さい」（4）（筆者註　ルリ、たかよは清止の妹、六郎はたかよの夫）。

この清止さんの二通の手紙から多くのことがわかる。たとえば、清止さんの任務であるが「私は小行李隊と云ふ隊ですから相当キケンです。歩兵のすぐ後約九町位の処まで行て玉を歩兵の人達に渡すのですから相当キケンです」（2）とあり、ほかには軍馬の世話などを行っていた様子がわかるが（2、4、5、7、8）、戦地へ向かいながらも、父親や子供のことを思い、涙にむせぶ心境が正直に記されている。

そして自分の移動先については、この後も細かく伝え、弘前から、広島（4）、宇品（5）、釜山（6）、豊台、北平へ（8）、趙縣へと行軍（9）、石家荘から順徳へ戦争に行く（10）、甕鹿縣に来ている（13）、などと二〇通の手紙のうち七通に地名を記し、家族に可能な限りを教えている。そして手紙が途絶えた場合も「若し話の通り三四日で戦闘に参加したら手紙は出せませんから其の時は便りのない時は元気で居ると思て居て下さい」（8）と予め知らせ、家族が心配しないようにとの気遣いが示されている。

自分自身の死の覚悟と生への執着については、たとえば、（2）のように自分の任務は歩兵に直接玉を渡す危険な仕事だといったすぐ後で「併し皆様の心が私を守て下さるし亦沢山の御守札も貰て居るから私は絶対に安全です。此方に来てからも隊からは明治神、岩手県からは県社八幡宮、宿からも一枚、家からの外に三枚も貰て居りますから決して心配することはありません」と任務の危険性を打ち消し、家族を安心させ自分自身を励まそうとする気持ちが書かれている。この後、昭和一二年一一月六日付けの、中国に渡って行軍を続けまだ戦闘に参加していなか

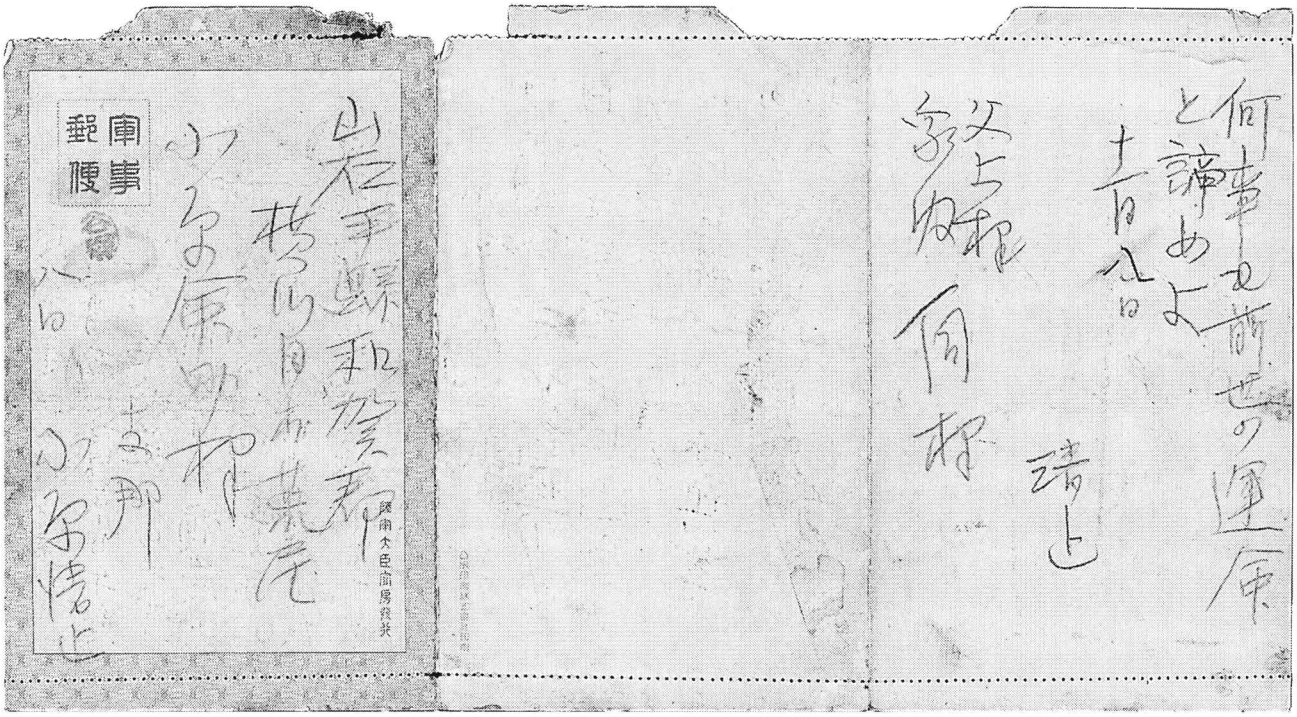

図2　小原清止さんが父命助さん宛に出した手紙（10）表

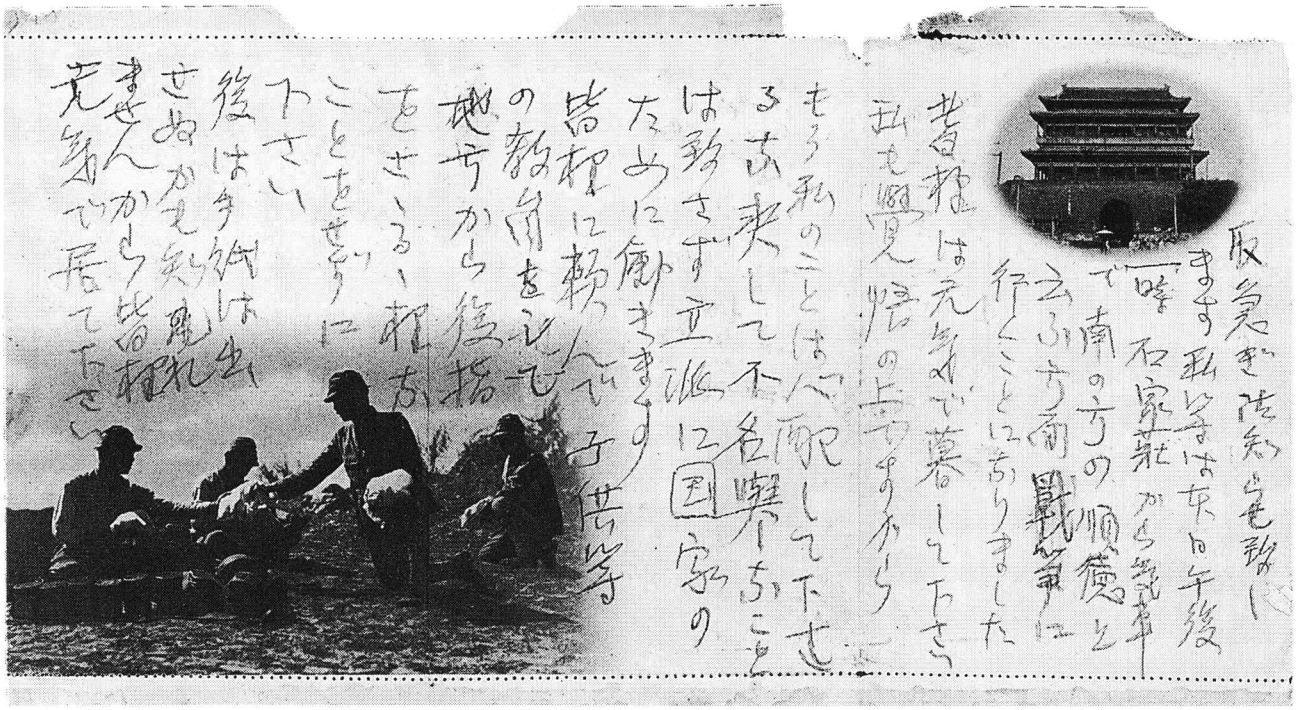

図3　小原清止さんが父命助さん宛に出した手紙（10）裏

った段階の手紙には「もし戦闘に参加しても家の人も諦めて居るだろうし私も決心して居るから是れも天皇陛下のため亦祖先のためですから、こうなるのも前世の約束ですから致しかたありません。私も決して死して帰ることありませんから心配せず家のことは皆で協力して暮して居て下さい」（9）と書いており、ここには、家の人も諦めているだろう、自分も死の覚悟はできている、と死の覚悟を示しており、自分の死については天皇陛下と祖先のためであり前世の約束だから仕方がない、と自分なりに納得しようとしている。しかしその一方、後半部分では、自分は生きて帰るといい、家のことは皆でやってくれ、ともいって、この時の清止さんには、死と生との間で大きな迷いがあることが読み取れる。しかし、その二日後、昭和一二年一一月八日、はじめて第一戦の戦場に行くことが決まった時の手紙には、「私も覚悟の上ですからもう私のことは心配して下さるな　決して不名誉なことは致さず立派に国家のために働きます。（中略）後は手紙は出せぬかも知れませんから皆様元気で居て下さい。何事も前世の運命と諦めよ」（10）と、国家のため、前世の運命だから諦めるしかないとの心境が語られている。戦場に向かう兵士たちはこうして否応なく死の覚悟を迫られていったことが読みとれるのである。

この戦闘は一一月九日、一〇日、一一日の三日間行われ、約二〇名の死者が出た。その仲間の死を体験して清止さんは「みんながかくごして居ることだから」（11）と書いていながら、その同じ手紙には「姉達ニ元気で居ることを知らしてくれ」と追記している。死の覚悟の中にあっても家族を想っての生への執着がにじみ出ている。

そうした死の淵に立ちながら戦場の兵士たちが最も願っていたこと、それは凱旋帰郷であった。清止さんも凱旋への期待の機会があった。昭和一三年旧正月七日付の手紙に、「此の前に言た○○をこしらへてをいたほうがよい。此の頃の話ではあんまり長くない間にかへれるか知れないもようだ。早くかへって三三の祝（妻コメの三三才の年祝い）とガイセン祝と一しょにしたいね。（中略）必ず○○はこしらへてをけ」（18）（○○はドブロクの意味と推定される）と書いており、清止さんの周囲で帰郷の話が出ていたことがわかる。しかし、（18）の手紙の後、旧正月二二日付の手紙は、ヒゾクセイバツをして帰ってきたところ、戦争終了の話が変わってしまっていた。帰郷の話もなくなってしまっていたのである。そこで清止さんは「いくさもしまったと思て居たが今度は又山をくの方にいくさに行くやうな話です。三月ごろかへるによからうと思て居たがだめだ。今年中はかへれぬと思て居ればまちがいなからう（中略）又さけのことは見あわせてくれ。かへるもかへらないも今十日位でわかるだらう。今年の新年会は家でやるようになってるはずだ。私が居なくともやってくれ。お前の三十三の祝は私が行てからやるやうにね」（20）と望郷と妻恋いの手紙を書いている。ここからは一日も早く家族のもとに帰りたいという気持ちと、新年会と三三歳の祝いなど戦地にあっても家長としての自覚と妻を思いやる愛情がよく伝わってくる。

（2）記憶

清止さんは昭和一三（一九三八）年三月三日に戦病死した。現在郵便と一緒に息子の小原博さんのもとに保管されている「死亡者情況」という陸軍によって作成された報告によれば次のように書かれている。

「死亡者情況

一、死亡者　故陸軍輕重兵上等兵　小原清止
一、本籍地　岩手縣和賀郡横川目村古舘壱百弐拾番地
一、病死自殺其ノ他変死中毒ノ別　公傷死
一、病名　咽喉頭部丹毒
一、死亡場所　中華民国山西省臨汾域
一、死亡年月日　昭和拾参年三月三日午前八時

一、當時ノ概要

昭和十三年二月上旬山西省方面ニ作戦スヘク行動ヲ開始スルヤ第三大隊小行李駆兵トシテ参加シ弐月中旬先ツ路安城ヲ攻略シ更ニ西進シ数十里ニ亙ル敵ノ堅陣ヲ突破シ弐月弐拾七日前兵タル第三大隊ハ臨汾域ニ向ヒ敵ヲ撃破シツツ前進中同日午後一時頃小行李ハ千伏村ニ到リ駄馬ニ水與ノ際隣接馬岩美号急ニ前進シ来リテ後方ヨリ同人ノ左側頚部ヲ大勤衝ニテ強ク擦過シ該部ニ受傷セルモ支障ナク其ノ儘戦闘行動ヲ継続シ臨汾域ニ入城スルヲ得タリ然ルニ三月一日ニ至ル急ニ悪化シ第弐野戦病院ニ入院加療ニ努メタルモ其ノ効ナク遂ニ三月三日朝死亡セリ

一、其ノ他留守宅参考事項

第三大隊小李駆兵トシテ渡支以来品行方正職務ニ熱心誠實ニシテ同僚ノ信望厚ク積極的ニ任務ノ遂行ニ努メ殊ニ戦闘間ハ弾雨ヲ冒シテ行動シ以テ小行李ノ任務ヲ完フシタル等賞スベキモノナリ」

これによると、清止さんは二月上旬、山西省臨汾県千伏村で急に突進してきた馬に左側頚部を擦過されたことになっている。一方、母親コメさんから聞いたという博さんの話では「馬に蹴られて死んだ」となっており、ここには微妙な違いがみられる。

博さんによれば、とても厳格だった父親の死を知った時、真っ先に思ったのは「これで怒られないですむ」ということだったという。しかし、博さんの祖父にあたる命助さんは跡取り息子の死のショックでまもなく死亡した（昭和一四年）という。清止さんの戦死の公報は比較的早く、昭和一三年三月一四日か一五日に入った。これは横川目村で一番早い戦死、戦病死であった。清止さんの遺体は、ちょうど横川目村から同じ昭和一二年八月二四日の動員令によって召集された人物がほかにも三人一緒だったため、伍長の指揮のもとで戦地にいた和尚さん（花巻市の人で当時二七歳だったという）による弔いの後、火葬に付されて、骨箱は軍曹か将校かそんな階級の人に付き添われて丁重に持ち帰られたのを覚えているという。骨は間違いなく清止さん本人のものであったと思われる。三月末か四月に弘前市で合同慰霊祭が行われ、博さんは母コメさんと参加した。そして合同慰霊祭の後、学校で村葬も盛大に行われたという。父の死後、昭和一四年に二〇〇〇円の国債証書が送られてきて、借金を返済した後、その利息九〇円で家族四人が食べていくことができた。村で一番早い戦病死であったことから、周囲からも深く同情されたことを覚えているという。

これについて清止さんの妻コメさんの『あの人は帰ってこなかった』に収録されている語りによると、同じ横川目村出身で同じ隊に所属していた兵士が帰郷した後、あらためて清止さんの死亡情況とその後の遺体の取扱い（葬儀）について詳しく聞くことができたことがわかる。まず死亡情況についてであるが、「死んだ時の様子、九郎殿だの友方殿から後で詳しく聞いたったが、あの人の死に方にしてはあんまり可哀想だったナ。なんべんも戦争さ出て弾さは当らねェでいたっていうのに、馬に蹴られて死んだなんてス。なんぼ苦しかったか。その傷から丹毒症になって、シャツを皆掻きむしって、となりの病人の卵盗んで飲もうとして、その辺よごして朝死んでだってス。喉かわいても、家で病んだ時のように水飲むわけにもいかなかったんだべナ」（七七～七八ページ）とあり、遺体の取扱いについては、「九郎殿、友方殿、茂治殿と三人して火葬にしてくれて麦粉でダンゴを作って上げて拝んでくれたっていうし、骨っコは間違いなくあの人の骨だっていうから、そればかりもいいと思わねエばならねエナス。でも口惜しかったナ。オレ骨もらっても、あの骨土さ埋める気にはとてもなれなかったもヤ。いつまでも枕元さおいて寝だったモ」（七八ページ）と述べている（博さんによれば、九郎はコメさんの実家の隣に住んでいた人で清止さんの戦死の時に仕切ってくれた上官、友方は清止さんの親友、茂治は清止さんの妹ルリの夫だと

いう）。このほか、そこに収録されている記述からは未亡人としての苦労という反面、出征当時抱えていた家の借金の返済、博さんの農学校入学、娘節子さんの結婚時の着物の反物の購入などができて経済的に助かったということもうかがえる。それは「支那事変」開戦当初という清止さんの戦病死の時期が、後の「大東亜戦争」とはまったく異なっていたことを示しており、遺体の取扱いや二〇〇〇円の国債証書の受領など比較的恵まれた対応を受けることができたものと思われる。

（3）死者の表象物

一般に死者の表象物としては、墓地に建てられている墓石、仏壇や寺に納められている位牌、屋内の座敷などに飾られている額縁入りの遺影や叙勲の表彰状、その他の遺品などがある。

清止さんの遺骨は、横川目ふれあいセンターと呼ばれる村の集会所に隣接する共同墓地の一画にある小原家の墓地に納骨されているほか、忠霊塔にも分骨され納骨されている。清止さんの墓石が建立されたのは昭和一五年七月のことである。墓石の正面には「義心院忠勲清止居士」、裏面には「故陸軍輜重兵上等兵勲八等小原清止昭和十二年九月一日支那事変応召歩兵第三十一聯隊ニ入ル同十三年三月三日支那山西省臨汾野戦病院ニ於テ公病死行年三十七歳　昭和十五年七月　男小原博建之」とある。位牌は自宅の仏壇にまつられているものと、檀家である東光寺（曹洞宗・花巻市笠間）の位牌堂に納めているものとがある。仏壇の位牌には「昭和十三年　俗名小原清止　元義心院忠勲清止居士霊　三月三日旧二月二日行年三十七才没　日支事変ニ応召中陣没」と記されており、その仏壇のあるザシキ（座敷）には昭和一三年三月三日付けで叙勲の賞状がかけられている。床の間のあるオクザシキ（奥座敷）には遺影がかけられている。

このように清止さんの存在を意識させる表象物としては、墓地と墓石、忠霊塔、仏壇の位牌、寺にある位牌、遺影、表彰状などがある。そのうち墓地や寺へ参る機会は盆や彼岸など一年のうちでも限られており、日常的な記憶保存は仏壇の位牌や奥座敷にかけられた遺影によってなされているといえる。

横川目村の忠霊塔は村の氏神である八幡神社に隣接した場所に設けられており、日清戦争、日露戦争、日支事変、大東亜戦争で戦死、戦病死した村人一八九柱の遺骨が分骨され納骨されている。そして毎年八月七日に横川目の遺族会によって慰霊祭が行われている。この時には毎年参加者を代表して博さんが導師役をつとめてお経をあげている。一方、檀家の東光寺では八月三〇日に檀家の戦死者一三五名全員の戒名と名前をあげて僧侶による供養が行われている。博さんによれば、清止さんは一番先に戦死したため、毎年一番最初に戒名と名前が読まれるという。

また戦没者の追悼と慰霊の行事としては、旧和賀町、北上市、岩手県をそれぞれ単位としているものがあり、旧和賀町を単位としては遺族会主催の追悼式と和賀町英霊を守る会が主催する追悼式が行われている。平成六（一九九五）年までは八月に旧和賀町全体の追悼式が竪川目にある環境保全センターで行われていた。この時は、和賀町内にある慶勝寺（曹洞宗）、光林寺（浄土真宗）、千徳寺（曹洞宗）、将軍寺（曹洞宗）の四カ寺の僧侶によってお経があげられ、遺族会の各位が一本ずつ献花を行っていた。この追悼式は北上市からの一五万円の補助金で営まれていたが、戦後五〇年目にあたる平成六（一九九五）年をもって予算が打ち切られたため中止となったという。遺族会とは別に和賀町英霊を守る会が主催する追悼式も八月下旬に竪川目の環境保全センターで行われていたが、数年前にこの会も解散となったという。

北上市を単位とする追悼と慰霊の行事としては、諏訪神社の春秋の祭典の後行われる慰霊祭、大和神社の大祭とその後行われる市主催の追悼式とがある。諏訪神社には戦没者の霊魂（みたま）一九〇〇柱がまつら

れており、遺族は奉賛会に所属して、そこで春秋二回、神社の祭典の後慰霊祭が行われている。一方、大和神社では四月三〇日に大祭が行われ、その後市民会館で北上市主催の追悼式が行われている。いずれも参加は自由で、参加者には紅白の饅頭が配られる。

岩手県を単位とする追悼と慰霊の行事としては、盛岡市の護国神社の春秋の大祭と八月三一日に行われる岩手県の追悼式とがある。護国神社には岩手県内三万三〇〇〇柱の霊魂（みたま）がまつられている。岩手県の追悼式においては遺族会と英霊を守る会が参加して、県民会館（数年前に都南文化会館に変更）で追悼式が行われ、その後、県内六四市町村の遺族会の主催で護国神社の前にテントをはって慰霊祭が行われる。これには村ごとの遺族会から約五名ずつ参加することになっている。

そして博さんによれば、清止さんの名前は墓地、仏壇、寺では戒名で記されているが、忠霊塔、護国神社、靖国神社、表彰状では俗名で記されているという。一方、県の追悼式には写真も名前もとくに表示されることはないという。

博さんは昭和六二年に退職するまで中学校教諭としてつとめ、日教組の組合員として熱心に活動し、研究会でさかんに発表を行ったりもしたため、教育委員会からはにらまれていたのではないかという。一方、靖国反対、君が代反対を唱える日教組に対し、「父親が戦争の犠牲者なのだから神様にまつってある靖国神社に参るのがなぜいけないのだ、慰霊祭がなぜいけないのだ、個人で神社に参るのは当然だ」と主張し、組合活動のなかで口論することもしばしばだったという。退職後、岩手県身体障害者福祉協会事務局につとめ、平成五年、母親のコメさんの強い希望によって横川目へ帰郷した。そしてすぐに遺族会会長に推薦され、就任した。毎年、岩手県の慰霊祭および追悼式に三回、北上市の慰霊祭および追悼式に三回、そして横川目村の忠霊塔の慰霊祭への遺族会会員への案内などを行うほか、年に一回靖国神社への参拝も企画するなど熱心に遺族会の世話役をつとめている。こうして博さんは横川目遺族会会長という立場から慰霊祭や追悼式のすべてに直接関与し、忠霊塔での慰霊祭においては導師役をつとめるなど積極的に戦没者の追悼と慰霊を行っている。その博さんが「父の死んだ山西省臨汾には、生きている間に一度は行ってみたいと思っている」という。この言葉には、清止さんが息を引き取った現地に行くことが最も父の存在を身近に感じることができる死者への追悼と慰霊であるという思いが込められているかのようである。

このように横川目村、和賀町、北上市、岩手県をそれぞれ単位とした慰霊祭や追悼式が営まれているが、博さんは平成六年まで行われていた和賀町全体の慰霊祭や追悼式が一番よかったという。同郷の同じ境遇の顔見知り同士が集まって行う慰霊祭や追悼式においては死者に関する記憶がより強く思い起こされるというのである。

以上のように死者を表象する物としては家屋内の仏壇（位牌）や遺影、墓地の墓石や忠霊塔、寺や神社、といういくつかのレベルがあり、それらの表象物に対応して戒名や俗名で死者を表現しながら供養や慰霊の儀礼が行われている一方、旧村、町、市、県、そして国へとそれぞれ幾重にも重なって集団的な追悼の儀礼が行われていることがわかる。そして、死者を表象する物の保存や儀礼への参加の心理的中核にあるのは、生き残った者が悲惨な戦死や戦病死をとげた死者をいつまでも忘れまいとする気持ちであり、霊魂（みたま）の安らかなることへの願いであるといえる。

❸菅沼義平さんの生と死

（1）記録

藤根村の菅沼義平さん（明治四四年生まれ）は、三度の応召の末、昭

和二〇年二月一三日にルソン島リザール県ダンバリッドにおいて戦死した。第一回目の応召は昭和八年六月一一日で現役兵として近衛歩兵第三連隊機関銃隊に入営し、翌九年一二月一〇日に帰休除隊している。その後、第二回目は昭和一六年七月一七日に臨時召集によって北部第二一部隊に入隊し、満州へ渡り、昭和一八年二月一六日に召集解除となって帰郷した。そして第三回目は戦局も厳しくなった昭和一九年六月一六日、再び召集されてフィリピンへと派遣され、昭和二〇年二月一三日、ルソン島リザール県ダンバリッドにおいて戦死した。当時三四歳で、海上挺進基地第二〇大隊陸軍伍長であった。

菅沼家は三代目当主寛司さんが整理した位牌の裏書によれば、文久元年に惣次郎という人物が分家して家を興した。それから義平さんで五代目となる。寛司さんの代に財をなしたといわれているが、その妻ゑんさんは菅沼家の長女で、後に弟が三人生まれたにもかかわらず跡を継いだ。しかし、寛司さんとゑんさんの夫婦には子供ができなかったので、ゑんさんの三人の弟のうち末の弟の五助さんに跡をとらせた。このような相続はこの頃よくとられた方法で「弟家督」と呼ばれていた。その五助さんの妻ヤスさんは大本家からもらった嫁で、子供も四人生まれたが、大正一〇年、四人目を出産するときに三三歳で死亡した。この時、義平さんは小学校に入った頃で、その後、祖母のゑんさんに育てられた。ゑんさんは孫の義平さんを母親代わりになって育てたといわれている。それは、昭和四年七月に盛岡の病院で蓄膿症の手術のために入院した折にもゑんさんが付き添いに来ていたことからもわかる（筆者註　高橋峯次郎宛の手紙（55））。

現在、妻のワカさん（大正五年生まれ）によって、現役の時を除く二回の出征中の手紙合計一三通が保管されている。そして義平さんは高橋峯次郎の縁戚にあたり、青年学校にも関係していたため、峯次郎からの新聞や『真友』の送付に応えて出した義平さんの手紙が峯次郎によって他の教え子たちからの手紙と一緒に合計六〇通が残されている。現役の時のものが三二通、第一回目の召集の時のものが二二通、出征中以外の時期のものや日時不明のものが五通である。つまり、義平さんの手紙には、家族へ宛てたものと、高橋峯次郎へ宛てたものとの二種類が存在するのである。

まず、義平さんが峯次郎宛てに出した手紙であるが、現役兵の時（昭和八年六月一一日から昭和九年一二月一〇日）に出した手紙は（1）～（32）までの三二通である。その内容は、入営の挨拶から始まり、除隊の挨拶で終わるまで、訓練や演習の報告や新聞送付のお礼、峯次郎の息子友次郎の面会、義平さんの弟の現役志願、義平さんの入院、昇進などの近況報告である。次に、満州出征（昭和一六年七月から昭和一八年二月）中に出した手紙は、（33）～（54）までの二二通である。その内容は、「軍務に精励」、「眞友」送付のお礼、青年学校の後進や村の様子を尋ねるもの、そして簡単な近況報告である。

たとえば「眞友」については、「今日は嬉しい「眞友」を御贈り下さいまして非常に珍しく拝見さして戴きました。誌上の皆様の動静が手にとる様に判りました」（49）、「我等の最も愛する眞友は、その後益々内容を充実なされまして、前線の将兵をどれ丈励ましてくれて戦斗力に影響を及ぼすことかと感謝に不堪へません。就きましては同封の御金は甚だ些少なものですけど、眞友発行の為に御使用下されますならば、幸甚至極であります」（36）、「先日は嬉しき眞友を御送付下され有難く御礼申上ます。前線にある者は、何んなに雀躍して見たことかと思ひます」（45）の三通に書かれており、「眞友」によって村の様子を知ることができることの喜びが伝わってくる。そして「眞友」発行を援助するために資金を送付したこともわかる。

また、義平さんがいる戦地の緊張を伝える手紙には、次のようなものがみられる。

「前略　皆様には御変りありませんですか。私も元気にて働いて居ります。村でハもう稲刈でありませう。青年学校方面も御多忙で嘸や御骨折の事と思ひます。来る可き査閲にハ活気ある教授訓練の下、優秀なる成績を獲得されんことを祈ります。大陸にも秋は訪れ、秋草の花も綺麗に咲いてゐます。某国の汽車も煙を吐いて走ってゐます。ハガキしか出されないことになってゐる、やってゐることも○○　先づは」(34)(○○は秘密か)(昭和□年九月二一日)

「前略御免下さい。其後、先生には御変りありませんですか。降小生ら至極元気で軍務に励んでゐます。村では旧お盆も過ぎましたね。今年の招魂祭ハ何うでしたらう?青年学校の方も御多忙の事でありませう。清□君善一君等も非常に骨が折れることでありませう。合同祝祭や指導員研究会、嘸や優秀な成績を飾ったこと、察してゐます。来るべき教練査閲ハ優秀な成績を以て過される様、遙か比満の地から御祈りいたします。ハガキしか許されぬ故、悪しからず」(37)

「随分長らく御無沙汰いたしました。御元気にてペダルを踏んで村の為め、青年指導の為め御奔走なされる姿が胸に浮かんで参ります。私も元気にて務めてゐます。去る青年學校査閲は優秀なる成績を収められし由、ほんとにうれしく感じました。先生を初め、職員御一同様方の御盡力の段は感謝いたします。横川目の指導員方は、親しい人達に変った筈でしたね。北満の地も寒さ愈々本格的になってきました。何も詳しいことも、又封書も止められてゐます。御諒承下さい。御歳暮も目睫に迫まってきました。御元気にて御越年あらんことを祈ります」(53)(昭和一六年年末か)

「十億の赤誠以って、昭和の十七年は朗らかに明けました。青年學校の教授訓練、軍事的にブチ込んで下さい。指導員諸氏や先生方によろしく。今後一寸御便り出し兼ねます」(38)(昭和一七年一月四日)

このように「ハガキしか出されないことになってゐる　やってゐることも○○」(35)、「ハガキしか許されぬ故、悪しからず」(37)、「何も詳しいことも、又封書も止められてゐます。ご諒承下さい」(53)、「今後一寸御便り出し兼ねます」(38)と書かれており、戦地からの情報が制限される一方、村の様子を尋ねる文章が増えているのが特徴である。

一方、義平さんから家族に宛てた手紙であるが、妻ワカさんによって現役兵の時のものを除き計一三通が現在まで保管されてきている。いずれも年月日の詳細は不明であるが、満州から出されたものが最も多く(一〇通)、盛岡(一通)、フィリピン(二通)からのものもある。宛名をみるとワカさんに宛てたものが多い。

手紙の内容をみると、義平さんを親代わりに育ててくれた祖母ゑんさんを気遣うものと田の様子など農作業を気にかけているものとが注目される。とくに、ゑんさんについては、ゑんさん宛ての手紙は二通(9、13)だけであるが他の家族宛の葉書や手紙のなかでもしばしば触れられ、「お婆様には体を大事になされて下さい」(1)、「御婆さんを初め家内皆んな豆しい由安心いたしました。(略)御婆さんは毎日スゴあみの由御金をためず、御菓子でも食べる様に云ってくれ。先頃の小包はほんとにありがたく頂いた事もだ」(4)、「御婆さんを初め家内中まめしくて働いてゐることと推察いたします」(5)、「御婆様や御母上様にもよろしくたのむ」(6)、「御婆さんにもよろしく」(7)、「その後御婆様には御変りありませんか、御伺い申上ます。定めし御達者にて御子守やら何かにとほんとに御苦労様です。(中略)御婆様は七十六になる処です

が、まだまだ元気にてゐて下さい。そして必ず御婆様の御顔を拝見する日のあることを信じてゐます」(13)、「御婆さん其後は達者ですか。あまり働いて体をすてない様に御気をつけられ下さい」(9)、「御婆さんによっく読んできかせてくれ、手紙ありがたかった、あの歌は」(11)、「御婆様には御変りなく御働きですか」(12)、など、気遣いがよく表れている。

農作業については、「稲作、平年作くらいには行くとの由安心いたしました。前田も今年は実入りは何らでしたらう?」(2)、「小原の差葺も終り稲刈も大分になった事と思います。外の人の手紙では五分作とか、七分作とか云ってゐるが、家の事も正直な処何の位だか」(4)、「稲刈ハ何の位になりましたか」(5)、「今は稲こき盛んでせう」(6)、「このハガキの届く頃は田打も終ったころか、又は田こなしでも始まってゐるだらうと思ってゐる。今年の田打始めには馬ならしは何らでしたらうか」(7)、「今では二番除草も初まってゐる頃か」(8)、「供出米は完納したでせうか」(12)、「稲扱きもすつかりと終ったでせう。今年は収穫もあったでせう。供出米の方は何の位でせうか、御知らせ下さい」(13)、など、家族の田の仕事や米の出来具合について案じているものが多い。

ここで、峯次郎宛ての手紙と家族宛ての手紙を比べてみると大変興味深いことがわかる。峯次郎宛ての手紙には義平さんの近況報告が中心であったが、満州出征中の手紙には「何も詳しいことも、封書も止められてゐます」「今後一寸御便り出し兼ねます」など、戦地からの情報が制限されていた、その緊張した状況も正直に伝えられていたのに対し、家族へは余計な心配をさせないようにとそのような文言は書かれてはいなかったのである。そして、『真友』送付の御礼、青年学校の後進の者や村の様子を尋ねる内容が多くなっていった。そしてフィリピンに派遣された後の手紙は家族には二通保管されているが、峯次郎には一通も残されていない。緊迫した戦況の中で葉書や手紙を出す余裕もなくなっていった可能性も考えられる。

フィリピンから家族宛に出された手紙は次の二通である。一通目の手紙は父宛て(12)、二通目は祖母ゑんさん宛て(13)である。

「その後は長らく御無沙汰致し申訳ありませんでした。皆々様には定めし御壮健にて秋の収穫に多忙なことと遠察申上ます。御婆様には御変りなく御働きですか。盛、光子(注、義平さんの次男、次女)等の子守にて御苦労様です。私も途中恙なく元気にて表記に到着いたし服務いたし居ります故、他事乍ら御□心ください。当地は年中夏の国です。今が一番寒い時なさうです。それでも蠅は澤山居り、夜蚊や蛍が飛んでゐます。バナナや椰子の実などあり食べられます。

村から一緒に来た者、七三、克巳、石田、松沼(長沼)、権蔵等皆んな元気でゐます。今が丁度御七晝夜の頃と思い此の手紙を書いてゐます。黒沢尻の御□もぢきですね。家の仔馬も大きくなったでせうか。ニハトリは卵を産ミますか。供出米は完納したでせうか。

清君(注　義平さんの長男)に　清君二学期もなくなる所ですね。大いに勉強しましたか。よくお母さんの言いつけを守り勉強したり手つだいしたりするのですよ。通信簿がきたら何が良とか優とか書いて此のハガキのとり返事を出して下さい。家の方にて変ったことは何か知らせて下さい。皆様寒くなる折柄御身大切に、サヨナラ」(12)

「その後御婆様には御変りありませんか、御伺い申上ます。定め御達者にて御子守やら何かにとほんとに御苦労様です。随分長らく御無沙汰をしましたが、これが最も早いつもりの便りです。今は黒澤尻のお□の頃でせうね。稲扱きもすつかりと終ったでせう。今

年は収穫もあったでせう。供出米の方は何の位でせうか、御知らせ下さい。この便りの少し前にやはり飛行郵便を出しましたが、私は途中恙なく表記にて服務いたして元気にてゐますから御安心下さい。御婆様は七十六になる処ですが、まだまだ元気にてゐて下さい。そして必ず御婆様の御顔を拝見する日のあることを信じてゐます。御友達の鍋倉の人や熊□カネ様等皆達者（欠）か。家の方にて何か変ったことがあったら此の便りの返事（欠）知らせて下さいませ。堀之内へも便りを出せずにゐるからよろしく伝えて下さい。康志様はまだ帰りませんか。清水の（欠）様は何のですか、御知らせ下さい。右一報まで」(13)

（欠は葉書の左上部分が三角に切り取られていた箇所）

こうして最後まで、家族宛ての手紙には同じような内容で、祖母のゑんさんを思いやる言葉と稲の生育や農作業の心配などが繰り返し繰り返し書かれており、家族に心配をかけるような軍隊生活や戦闘についてはほとんど触れられていない。家族に伝えたい言葉は、いつ、どこにいても変わらなかったというのが義平さんの手紙の最大の特徴である。受け取り手であった家族も、手紙や葉書がくるだけでまだ無事であることがわかり安心できたという。まさに家族宛の手紙は生きていることを知らせるための手紙だったのである。

(2) 記憶

ワカさんの語りによれば、昭和六年に結婚し、二男二女に恵まれたが、長女サツ子は昭和八年一二月に数え年二歳で死亡した。義平さんは現役兵として東京で任務についている最中であった。ワカさんがサツ子をエジコと呼ばれる藁を編んで作った籠に座らせて座敷において農作業に出た後、おやつの時間に母乳を飲ませようと帰ってみると、頭からジャブジャブと汗をかき、咳き込んでおり乳も吸えない状態であったという。病院に連れて行き酸素吸入などしてもらったが赤ん坊は助からなかった。子供が死んだため義平さんを呼び戻そうとしたが、大姑のゑんさんが「途中で帰らせては二等兵で階級が上がらないから」と反対したため、義平さんは帰ってこなかった。ワカさんは、夫は子供が死んだのに帰ってこなかった、大姑のゑんさんが帰らせてはいけないといったことを、今でも恨めしく思っているという。

義平さんは昭和二〇年二月一三日にルソン島で戦死していた。しかし家族はそれを知らず、昭和二二年一二月一三日に戦死の公報が入るまで義平さんの帰りを待っていた。ワカさんが盛岡へ遺骨をもらいに行ったが、箱の中には木片と紙片が入っていただけであった。この木片と紙片は菅沼家の先祖代々之墓と刻まれた石塔に納められた。

しかし、ワカさんは夫が「死んだと思えない」ので、役場の遺族会で調べてみた。すると、フィリピンに行った人は皆義平さんと同じ日に死亡していることがわかった。それを見て、ワカさんは「こんなばかなことあるはずない」と思った。この時ワカさんが手がかりにした人名はフィリピンで義平さんと一緒にいた「村から一緒に来た者、七三、克巳、石田、松沼（長沼）、権蔵等皆んな元気でゐます」(12) との一文によるものと推測される。公報の入ったその後、フィリピンに行った人のなかで、同じ村の義一さんという人が一人帰ってきた。その時のことをワカさんは次のように語ってくれた。「舅の五助が駅のそばの農協の精米所に米搗きに行った時、駅から降りて「似た人来たな」と思ったので、「義一さん」と聞いたら、「そんだんす」と言うので、「義平、どう…」と聞くと、「一緒だったけど、後、知らね」と言われた。これでルソン島に上陸したことまでは確認できた」。

終戦後、まもなく義平さんの弟の誠さんが妻と二人で満州から引き上げて藤根村の実家に帰ってきた。ワカさんは誠さんの話で、引き上げの

図3　菅沼義平さんの墓　碑文について説明してくれるワカさん

途中の船で、奥さんは「ロスケ（ロシア人に対する当時の蔑称）にかわいがられないように髪の毛を切って坊主頭にした」といい、藤根村に帰って来た時もまだ髪の毛は生えていなかったこと、「ロスケは子供が泣くのも嫌がった」ということ、二歳の子供を栄養失調で亡くし、海に投げてきたこと、などを覚えているという。そして誠さんはまず一番に子供の墓を作ったという。

誠さん夫婦は子供の死の場にいて死んだことを確認していたが、義平さんの死の様子を知る人はいなかった。そこで、ワカさんは終戦後約二年の後に公報が入った時も今も「義平が死んだのを見た人はいない」、「死んだとは思えない」、「よその人は（義平は）死んだ、死んだというが、信じたくない」いう思いでいつづけている。

（3）死者の表象物

死者を表象する物を、墓地に建てられている墓石、仏壇に納められている位牌、屋内や寺堂内の遺影やその他の遺品に分けてみてみると、義平さんの場合は次のようになる。

まず、義平さんの身体の一部としての遺骨は戻らなかった。ワカさんが盛岡から引き取ってきた骨箱に入っていたのは木片だけであった。これは、村の共同墓地に建てられている菅沼家先祖代々之墓に納められた。しかし、昭和五二年、義平さんの三三回忌を機に先祖代々之墓の横にあらためて義平さんのハカ（石塔）が建てられた。角柱型の石塔の正面には「故陸軍伍長　勲八等　菅沼義平之墓」、裏面には「昭和五十二年九月十五日菅沼ワカ　清　建之」と書かれており、さらに正面に向かって左側側面には軍隊手帳をもとに次のような出征から戦死にいたるまでの兵士としての年譜が刻まれている。

光殊院釋義賢居士　俗名義平　行年三十三才
昭和八年六月十一日現役兵トシテ近衛歩兵第三聯隊機関銃隊ニ入営
昭和九年十二月十日帰休除隊
昭和十六年七月臨時召集北部第二十一部隊ニ入隊野戦道路第三中隊ニ編入
昭和十六年八月盛岡出発満州東安省虎林県林着関東軍ノ隷下ニ入リ道路改修整備及ビ陣内補強作業ニ従事
昭和十八年二月召集解除
昭和十九年九月第二回召集比島派遣威七二六〇部隊ニ編入
昭和二十年二月十三日比島ルソン島リザール州ダンバリットノ戦闘ニテ戦死

また、小田嶋恭二「高橋峯次郎と七千通の軍事郵便」で述べられているように、昭和二六年に峯次郎によって建てられた平和観音堂内の長押には他の教え子たちと一緒に義平さんの小さな写真もかけられている。戦後、峯次郎の個人的反省世界の中に義平さんは位置づけられていたのである。

家の仏壇には義平さんの位牌が納められている。それは白木の繰り出し位牌で、表面に「昭和二十年二月十三日　五代目　光殊院釈義賢居士」、裏面に「俗名　義平　陸軍伍長　三十三才」と記されている。これはオクザシキ（奥座敷）の仏壇に安置されている。この繰り出し位牌のなかには菅沼家代々の家長とその妻、早世した子供たちの白木の位牌が納められている。ワカさんによれば三代目当主寛司さんがこれらの位牌を整理し、各人の死亡理由や功績、菅沼家における位置づけなどを記したもので[21]、寛司さん以後の死亡者については代々の当主が記録をしたものである。その裏書によれば、菅沼家は文久元年三月に三一歳で分家した惣次郎という人物（慶応三年没）が初代とされ、義平さんが五代目の当主である。

ワカさんは夫の死を信じていないという思いに変わりはないが、この昭和五二年、夫の三三回忌に墓を作った理由は、やはりひとつの区切りにしようと思ったからだという。その三年前、昭和四九年に小野田寛郎元陸軍少尉がフィリピンのルバング島から帰還した姿をみた時、ワカさんは「義平もどこかに何とかして生きてるのではないか、何か食べているのではないか」と思った。しかし、義平さんからの手紙に「蚊帳を吊らないと眠れない」とか「バナナばかり食べている」ということが書かれていたのを思い出すとやっぱりだめかと思ったという。

昭和一九年六月、義平さんが三回目の出征でフィリピンに派遣されると知った時、義平さんはワカさんと納屋のところに座り、「はーあ」と深い溜息をついたという。ただそれだけだったというが、ワカさんにとって義平さんとの時間はその場面で停止しているかのように今もよく覚えているという。義平さんの死を心底からは信じられないワカさんにとっては義平さんからの生の知らせであった手紙こそがまだ義平さんと自分とをつなぐ大切な記念品となっている。

❹生の知らせと死の知らせ

この二人の事例でみてきたように、出征兵士の家族への手紙とは自分はまだ生きているという生の知らせであったことがわかる。それに対して死は公報によって家族に過酷に知らされる。手紙とはまさに生の知らせであり、公報とは死の知らせなのである。

聞き取り調査のなかで興味深いのは、生死不明を知らせる手紙や戦死の公報を受け取った家族は、それだけではどうしても死の知らせを受け入れられず、何とか聞き合わせ、問い合わせを行い、その真偽について自分なりに確認しようとしている点である。死の確認への執着、それはなぜか。その意味するところを考えるために、三つの例を参考にしてみる。

事例1　小原辰男さんの場合

横川目に住む小原ヒサさん（大正九年生まれ）は昭和一七年一〇月に鉱山で分析係をしていた小原辰男さん（大正五年生まれ）と結婚した。姑のヨシさんも夫を大正一五年に亡くしていたため、息子夫婦と一緒に暮らした。昭和一八年一二月に長男が誕生する。そして昭和一九年三月一九日に出征した。ヒサさんは姑に子守を頼み、鉱山の配給所に勤めるようになった。辰男さんからは一週間に一度は手紙がきていた。その手紙は現在は紛失している。辰男さんははじめ満州牡丹江へ行き、のちフィリピンに行ったが、ヒサさんは辰男さんの戦友から「小原さんは南方

に行った。二カ月もすれば戻る」と伝えられていた。ところが、昭和一九年一一月に会社に「生死不明」の手紙が届いた。ヒサさんは妙なことにその日の朝、「カーン」と仏の鉦の音がしたので「はて、何だろう」と思っていたら、この手紙がきていたのだという。ヒサさんはそれまで、毎朝、事務所から配給所まで始業のサイレンがなるまでに着けば夫は大丈夫、サイレンがなれば難しいと思って、サイレンがなるかならないかのうちに配給所に入るように努めていたが、その朝にかぎって少し遅れてしまい、鉦の音が聞こえたのだという。

この生死不明の手紙が来た後、すぐに盛岡の軍事係に「どうしてこういうことがわかったか」と手紙で尋ねたところ、「千葉県の何とかさんが帰ってきたからわかったことです」と返事がきた。そこで、ヒサさんは千葉の人に会って聞きたいと思い、もう一度盛岡に「その千葉の人の住所を教えてもらいたい」と手紙を書いたが、返事はなかった。その後、鉱山の社宅の外を軍靴が通る音がすれば、そのたびに夫が帰ってきたかと耳をすませたものだというが、昭和二二年七月にとうとう戦死の公報が入った。そこには辰男は昭和二〇年三月二八日にフィリピンで戦死と書かれていた。この公報が入って、その日のうちに近所の人たちが集まってくると、とたんに暗闇のなかに入ってしまったようだったという。姑は、昭和一八年六月に次男を戦死させており、それに続いて長男も戦死したため、すっかり性格が変わってしまったという。その後、ヒサさんは姑と一人息子とともに実家の横川目に帰って雑貨店を開いたが、姑はヒサさんに「神も仏もない」と言ったり、近所の人が餅をついたといって届けてくれたりしてもその人に向かって「オレは何もいらない、息子だけいればいい」などと言いたい放題いって、いつも怒っていた。その姑は昭和三〇年に七五歳で亡くなった。辰男さんの遺骨は帰らず、「小原辰男」とだけ書かれた紙一枚だけの骨箱を受け取っただけであった。

事例2　小原徳士さんの場合

小原ミツさん（大正一三年生まれ）は、昭和一七年に横川目村荒屋の小原徳士さんに嫁いだ。結婚後六カ月の昭和一八年一月に徳士さんは出征し、昭和一九年四月にパプアニューギニアでマラリアにかかって戦病死した。出征当時、ミツは妊娠二カ月であった。その後生まれた娘には、舅が徳士さんのトとミツさんのミを一字ずつとってトミと名づけた。

ミツさんの話によれば、親戚の者が新聞を読んでいて「徳士はパプアのそばにいて大丈夫だ」と言っていたので安心していたが、昭和二二年になって平泉の菅原きんやという人が徳士さんと同じパプアニューギニアから帰還した時、家を尋ねてきた。「小原徳士という人を知っていますか」と聞いたら、「わからないからこの書類を見てください」と言われた。後で思えばその菅原さんは公報を配達する係だった。そこに徳士さんの名前があり、マラリアで死んだことが記されていた。舅、姑、徳士さんの妹、そしてミツさんも家の者は仏壇のところでわんわん泣いた。舅は昭和一七年一二月に次男を戦死させており、つづいて跡取りの長男も戦死したと聞くと、「子供を亡くした悔しさ」で手当たりしだいに手紙や葉書、軍隊手帳などを捨ててしまった。

次の日は村の運動会だったが、ミツさんは「運動会どこじゃない、もう一回聞きにいかなきゃ」と思い、娘を連れて平泉の菅原さんを訪ねた。菅原さんもマラリアにかかっていて、しゃべるのも辛そうだった。顔をみると涙ばかりがこぼれて、実際には何も聞くことができなかった。ただ菅原さんは「とってもまじめな小原さんだった。まじめな人に先立たれた」と言っていたという。

徳士さんは「二年したら帰ってくる」と言って舅と姑をミツさんに頼んで出征していった。夜中の二時一五分頃亡くなったのだが、ちょうどそのころ、不思議なことに田んぼに立てる杭がいきなりくずれる音がし

た。ミツさんは夜中にもかかわらず、目を覚まして子供を抱いて外を巡ってみた。しかし何も崩れてはいなかった。ミツさんはその時これは何か不吉な「知らせ」だと思ったという。

その後、ミツさんは娘を連れて盛岡に骨箱をもらいにいった。箱がカタカタなるから汽車に乗って中をみたら木片が一つ入っているだけだった。北上駅に下りると駅長がテーブルに骨箱をおいて蝋燭と線香で拝んでくれた。この徳士さんの骨箱は家の仏壇に三年間あげておいた。それは父親の顔を知らない娘のためにミツさんがせめて「自分の手で父親の骨に土をかけさせて、父親の思い出を作ってあげたい」と思い、娘が七歳になるちょうど「三年の仏」と呼ばれる三年忌に石塔を建てることにしたからである。これは徳士さんのハカ（石塔）をつくることによってミツさん自身ひとつの区切りをつけようとしたのにほかならない。

図4　菊池スエさんによって建てられた夫の墓

ミツさんは夫の徳士さんの死の知らせを伝えに来た平泉の菅沼さんの家を今一度、訪ねてみたいと思いながら現在に至っているという。

事例3　角谷松太郎さんの場合

菊池スエさん（大正一一年生まれ）は昭和一六年八月に横川目で魚店を営む角谷松太郎さんと結婚した。昭和一七年一月九日にその松太郎さんは出征した。スエさんは妊娠三カ月でつわりのひどい時であった。松太郎さんは秋田に三カ月滞在して、その後満州へ渡り、さらに南方（フィリピン）へ派遣されたと聞いていた。

戦争が終わって二年が過ぎた昭和二二年、軍服を着た人が二人、スエさんの店に来て公報を置いていった。それで、松太郎さんが昭和一九年一一月一五日に戦死していたことがわかった。まもなく秋田から松太郎さんの名前で爪と髪が送られてきた。これは満州に行く前に松太郎さんが用意していったものだという。家ではこれを神棚にあげて拝んでいたが、後に忠霊塔に納めた。また、役場に骨箱をとりにいったら、「故角谷松太郎」と書かれた木片だけが入っていた。これは角谷家の墓に納骨した。学校で村葬が行われ、その後何日かして家でも葬式をした。その翌日、檀家寺の慶勝寺（曹洞宗）へ仏送りをして帰宅したところで、親族一同に残ってもらって、それまで酒癖が悪くてスエさんを困らせていた舅を避けて、娘を連れて実家に帰る許可を得た。

スエさんは夫の骨が帰ってくるまではそんな舅のもとでもがまんしようと心に決めていたのであった。スエさんは角谷家からは籍を抜いたものの松太郎さんを供養する気持ちに変わりはなかった。いつも、夫がどこでどのように死んだのかが気になっていた。ただ、「海で死んだ」と

だけは聞いていたので、暖まってもらおうと思い、毎朝仏壇に熱いお茶を供えることだけは欠かさず今も行っている。

昭和五五年、松太郎さんの公報が入ってから三三年目にあたって行われた三三回忌にあたり、檀家寺の僧侶の口から、スエさんが分骨を希望していることを角谷家に伝えてもらい、自分の菊池家の墓地に松太郎さんの石塔をあらためて建立した。石塔には「放光院直傑忠道居士　故陸軍伍長角谷松太郎二十三才　昭和十九年十一月十五日時刻不明　北緯三三・一七　東経一二八・〇七ノ海上ニ於テ戦死ス」と記した。この死亡場所の緯度と経度は遺族会から教えてもらったものであったが、海上で戦死したというだけでその状況ははっきりしなかった。二〇〇〇年一一月、私たちの聞き取り調査を機に思い立って、スエさんはそれまで一度も行ったことのなかった角谷家の墓地の松太郎さんの墓石への墓参を行うことにした。それにつき合ったとき、私の目には、角谷家の墓石を前にしたスエさんははるか遠い日をしみじみと思い出しているかのようにうつった。翌年、靖国神社建立百二〇周年にあたって御神前を送金したところ、偶然にも靖国神社から郵送されてきた「祭神之記」には松太郎の死亡場所が「南朝鮮海上（あかつき丸）」と書かれてあった。早速、スエさんは私たちに「祭神之記」を書き写したものと手紙を送ってくれた。その手紙には「びっくり致しました。五十七年ぶりにようやくはっきり、はじめて分りました。五十七年間の内、何回もお寺様で御供養はして頂いて居りましたが、此の住所ははじめてなので「五月十日午前十時」お寺様へ行って御供養をお願ひして居りますので、娘と二人でお参りに行きます。とてもありがたい事です・・・余りうれしいやらびっくりしたやらで、先づは先生の所へお知らせ致したくペンを取りました」（五月九日）と驚きと喜びとが書かれていた。スエさんはこの時の私たちとの墓参がきっかけになっているにちがいないと奇妙な縁を感じているという。スエさんの場合、戦後六〇年近い年月を経た今でもなお夫の死んだ時のことをまだ少しでも詳しく知りたいと思っている。

これら菅沼義平さん、小原辰男さん、小原徳士さん、角谷松太郎さんのいずれの場合も昭和一九年以降に戦死しているが、その公報は昭和二二年になって入っている。そのちょうど昭和一九年頃というのは、現在私が聞き取りを行っている元兵士で京都市在住の鳥谷芳雄さん（大正一一年生まれ）によれば次のようであったという。

自分は元野砲兵第一二二連隊に所属し、中支、揚子江の沿岸警備の任務についていたが、昭和一九年くらいから戦争が激しくなり、食料や燃料の補給が途絶え、作戦に出たら現地「徴発」によるしかなかった。その「徴発」も効果なく、兵士たちは食料難で体力も続かなくなる。すると上官たちは「どんどん死んでいけ、どんどん補充できる」と平気で言っていた。そして「行方不明の歩兵はいろいろ調べないで戦死ということにしてしまった」、「自分の部隊だけでも一二、三人生死不明者がいた。本当の戦死者よりもその方が多かった。生死不明とは自殺や逃亡した者のことだ」と語っている。

これらの体験談からは、一兵の命の重さと軽さ、があらためて浮かび上がってくる。一人一人の戦死者は家族にとってはかけがえのない人間であり、それゆえ死の状況確認へのこだわりの衝動が共通しているのに対し、軍隊という組織や集団にとっては一兵は「一銭五厘」といわれ「いくらでも代わりがいる」といわれるほど、その命は軽視されていたのである。

❺論　点―死の受容と「供養・慰霊・追悼」―

以上、戦死、戦病死という民俗的にみて異常なる兵士の死を家族がどのように受けとめたのか、そして受け入れていったのか、について記録

と記憶と死者の表象物という三つの資料的側面から簡単な整理を試みてみたが、注目された点をまとめてみると、以下の通りである。

第一に、兵士から家族への手紙の特徴である。小原清止さんの場合、その移動先を細かく知らせていた点が注目される。それは自分の生存を伝えるものであった。そして、死の覚悟を繰り返し述べながら、決して死ぬことはあるまいとも書いて生への執着もみせており、いよいよ戦闘に参加するに至って「後は手紙は出せぬかもしれません」と不安を示している。ここからは生への執着を絶ちきれないまま「覚悟、覚悟」と繰り返し、戦場へと向かわざるを得なかった農民兵士の心境が伝わってくる。そして清止さんの手紙の最大の特徴は、戦闘状況についてはほとんど書かれておらず、家のことばかりが書かれていたという点である。家族に心配をかけぬようにとの配慮もうかがえるが、何よりも清止さんの身体は戦地にあっても、思いは常に故郷の家にあったものと考えられる。

菅沼義平さんの場合、妻ワカさんへ一三通、高橋峯次郎へ六〇通と宛先を異にする手紙が保管されており、その内容上の差異が注目された。まず、義平さんの手紙でも妻宛ての手紙には軍隊生活や戦闘についてはほとんど触れられておらず、家のことばかり書かれている点である。それは季節ごとの田んぼの様子と農作業、そして祖母ゑんさんへの気遣いに集中していた。家族に伝えたい言葉はいつ、どこにいても変わらず、ワカさんによれば手紙に書かれている内容よりも、手紙が届けられることだけで、義平さんの生の知らせと受け取ることができ、安心できたという。まさに手紙は生の知らせであった。一方、峯次郎への手紙に書かれていたのは、『真友』送付のお礼、青年学校の後進の者への配慮、軍隊生活について、などであり、家族には書かれていなかった戦地のことが書かれているのが特徴である。家族に出す手紙と先生に出す手紙との相異点を知らせてくれている点で、両者の資料的位置付けを考えさせてくれる貴重な情報といえる。

小原清止さんの場合も菅原義平さんの場合も家族宛の手紙において共通する特徴は、戦闘状況にはふれず家のことばかり書いているという点である。二人の農民兵士は身体は戦地にいても心は常に故郷の家、家族のもとにあったのであり、兵士にとっては手紙を出すことが、同様に家族にとっては手紙がくることが、戦地にいる夫や父親がまだ生きているという生存の知らせであった。

第二に、戦死、戦病死者に対する家族の側の対応の混乱である。公報によって戦死、戦病死の知らせを受けた家族は、自治体が行う公葬に参加し、その後、家での葬式を行ったという。そうして集団的にいわば流されるかたちで葬式が行われたが、妻をはじめその家族にとっては看取りが行えなかった死、死に際も死に顔も確認されなかった死、そして遺体のない葬式、など、それまで地域社会で伝統的な民俗として伝えられてきていた死の迎え方や葬式のあり方とは全く異なる普通では考えられない異常な死の受容を迫られたわけである。葬式という儀礼的手続きは流れのなかで終わり、村の人たちはその死を承認するものの、家族にとっては必ずしも確認できない死を、十分に受けとめ、受容することのできないままの状況に置かれたわけである。そこで、残された妻たちは共通して、夫の死の確認のために何としても自分で聞き合わせ、問い合わせ、確認を行おうとする衝動に突き動かされた。昭和一三年に戦病死した小原清止さんの妻コメさんのように、夫の死を看取った人物がいた場合には、その人物から直接話を聞くことによって、また送り届けられた遺骨によって死を受け入れているが、菅沼義平さん、小原辰男さん、小原徳士さんなど戦局が厳しくなった昭和一九年以降の戦死、戦病死の場合のように、必ずしも看取った人物がいなかった場合には、死の公報だけでは残された家族はすぐには死を受け入れることはできなかった。看取りを行うことができなかった死の分だけ、その死を事実として受け入

れるまでに長い時間と手続きとを要したことがわかるのである。[22]

第三に、戦死、戦病死した夫の墓を作る動機である。小原コメさんは昭和一三年に夫が戦病死した後、比較的早く一五年には墓を作った。その動機は夫の死が同郷の戦友によって家族に報告されており、遺骨も本人のものが帰ってきたため、死を疑う余地がなかったということで死の受容がなされていたことと、特別弔慰金がおりたことによる経済的背景もあってのことと考えられる。一方、菅沼ワカさんは義平さんの三三回忌をきっかけに昭和五二年になってようやく墓石を建てている。この年、ワカさんはすでに六一歳で、自分の残りの寿命を考えるようになっていた。この墓を作るという決断は、これまでただ一人だけひきずってきた夫の死を受け入れられない状態を一度断ち切って、墓を作ることによってあらためて死者を自分の心につなぎとめようとしたものである。また、菊池スエさんのように夫の死をすでに受け入れている者にとっても、昭和五五年、三三回忌にあらためて分骨して自分の意志で夫の墓を作り、「菊池スエ建之」と刻むことによって死者と自分とのつながりをもう一度設定しておこうとしている例もある。戦死、戦病死した夫の死を受け入れたくなかった二人が、六〇歳を越えるという老境を迎えるにあたって墓を作ったのは、来世へむけての準備であり、まさに墓とは生者と死者との関係性の「切断と接合の装置」に他ならないのである。

第四に、死者の表象物の重層性、重複性と「供養・慰霊・追悼」儀礼の重層性、重複性である。死者の表象物には、家屋内では仏壇の位牌、座敷に飾られた遺影や叙勲の賞状、家屋外では墓地の石塔、寺に納められた位牌、忠霊塔などがあり、さらには広域的に県レベルの護国神社、国レベルの靖国神社などがある。そして、多くの儀礼が無意識のうちに慰霊祭と呼ばれる傾向があるが、それぞれの儀礼内容の性格から分類してみれば、「供養」、「慰霊」、「追悼」の三種類があることがわかる。それらの関係性を整理してみると、家族、親族が行う法事や檀家寺で行う仏教儀礼の場合には戦没者の「供養」であり、村の忠霊塔や神社、また護国神社、靖国神社などの神道儀礼の場合には戦没者の「慰霊」であり、行政の市町村や県を単位に行う場合には戦没者の「追悼」である。死者に対する民俗儀礼としては、普通死の場合には伝統的に「供養」であり、異常死の場合には「慰霊」である。そして宗教色を排しながら儀礼的にその人物の死を悼む場合には「追悼」である。これらの三種類は当然その意味も機能も異なり、「供養」の場合には成仏、「慰霊」の場合には神格化、「追悼」の場合には人格維持、というそれぞれの死者の位置づけへの方向力が作用する。そして最も死を美化するしかけが「慰霊」であることはいうまでもあるまい。[23]このように、戦死者、戦病死者の表象物および儀礼は、空間的重層性とともに宗教儀礼的重層性、重複性をも内含している点にその特徴があるといってよい。

註

(1) 二一世紀を迎えた現在注目されるのは、天野正子が『老いの近代』（岩波書店 二〇〇〇年）のなかで、被爆者が自分の「残された時間」を意識し始めたとき、はじめて被爆体験を語らねばという思いをもつと述べているように（一一二ページ）、元兵士らについても老いの自覚が、戦争体験を書き残さねば、話しておかねば、という大きな動きをつくり出しつつあるといえる。

(2) そして、これらの資料の総合的な分析と活用の例には、森岡清美『決死の世代と遺書―太平洋戦争末期の若者の生と死―』（吉川弘文館 一九九一年）、藤井忠俊『兵たちの戦争―手紙・日記・体験記を読み解く―』（朝日新聞社 二〇〇〇年）などがあるが、現状は、方法論的な模索とともに始められたばかりといえる。

(3) 『きけわだつみのこえ―日本戦没学生の手記―』東大協同組合出版部 一九四九年。

(4) 塩川優一『軍医のビルマ日記』日本評論社 一九九四年。

(5) 後藤弘『征き死なん春の海―海軍飛行予備学生の日記―』税務経理協会 一九九四年。

(6) 勝見明『戦場に残された日記』プレジデント社 一九九五年。

(7) 岩丸定『1945年応召第二国民兵の手記』近代文藝社 一九九五年。

(8) 「平和の礎」(平和祈念事業特別基金)や読売新聞大阪本社社会部「新聞記者が語りつぐ戦争」(新風書房)などのシリーズがある。

(9) 岩手県農村文化懇談会編『戦没農民兵士の手紙』(岩波新書 一九六一年)。これについては共同研究研究会(二〇〇〇年二月二六日)において、赤澤史朗氏が「『戦没農民兵士の手紙』をめぐる論争」を発表。

(10) 「白鳥町戦没者の手紙」編集委員会編『白鳥町戦没者の手紙』一九七六年。

(11) 菊池敬一『七〇〇〇通の軍事郵便—高橋峯次郎と農民兵士たち—』柏樹社 一九八三年。

(12) 和我のペン編『農民兵士の声がきこえる』日本放送出版協会 一九八四年。

(13) 吉田とら・成子編『とうちゃんの軍事郵便』そしえて 一九八七年。

(14) 青木一『一日一信—戦地から妻への一六〇〇通の葉書』(大空社 一九九六年)。これについては共同研究研究会(一九九八年九月一三日)において、青木氏に聞き取り調査を行った鹿野政直氏より発表がなされ、「"兵隊先生"青木一の中国戦線」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四四—四 一九九九年)に論じられている。

(15) 岩崎稔『或る戦いの軌跡—岩崎昌治陣中書簡より—』近代文藝社 一九九五年。

(16) 四条紫雷『ガ島に死すまで—一兵士の手紙より—』近代文藝社 一九九六年。

(17) 前掲註(16)、五ページ。

(18) アジア太平洋戦争期の兵士の最期の手紙を「遺書」としてその声を編集したり(『アジア太平洋戦争・私の遺書』日本放送出版協会 一九九五年など)、その声の分析を試みた論考(森岡清美『決死の世代と遺書—太平洋戦争末期の若者の生と死—』)などにも、死の覚悟を迫られた兵の声を「遺書」として明確に位置付けてあらためて聞こうとしている点からも受け取り手よりも書き手の声に注目されてきたことがわかる。

(19) 和賀町は一九五五年に藤根村、横川目村、岩崎村の旧三村が合併した翌年の町制施行によってできた町である。日中戦争およびアジア太平洋戦争中、和賀町全体の戦病死者は、藤根村で一三〇名、横川目村で一八八名、岩崎村で二二五名の、合計五三五名であった。そして、いわゆる「戦争未亡人」となり、その一生をおくってきた女性たちはすでに多くが八〇歳代になっている。和賀町を単位として「戦争未亡人」によって組織されている黄菊会という組織があるが、その黄菊会の会員は昭和六〇年には一〇〇名であったのが、現在では死亡者が増え、二八名に減っている。そしてその子供たちも五〇歳代以上になっている。黄菊会の妻たちへの筆者の聞き取り調査によれば、当時、葉書や手紙はすべて舅姑が隠し持ってしまい、手紙がきたことすら知らされていなかったという話や、夫が死亡した後の転居などが重なりどさくさのなかで郵便を紛失してしまったというような話が少なくない。また、家を改築する時に仏壇を動かしたら仏壇の背板の間から手紙が出てきたが、代がわりしていたため焼却処分されてしまったという話も聞かれる。

また和賀町の軍事郵便については、すでに菊池敬一『七〇〇〇通の軍事郵便—高橋峯次郎と農民兵士たち—』(柏樹社 一九八三年)が知られている。菊池は昭和四二(一九六七)年、藤根村の高橋峯次郎という青年学校教師が明治三八(一九〇五)年から終戦直前まで『真友』という村の様子などを書いた通信を出征した教え子の兵士たちに送り、それに対する返事をまとめて観音堂脇の隠居所と自宅の物置に保管していたのを発見した。その時発見された峯次郎宛ての軍事郵便の数は七〇〇〇通を越えるものであった。その後、一九九八年、歴博の本共同研究の調査によって峯次郎の実家である高橋家の仏壇脇の戸棚から息子の友次郎からの葉書と手紙が発見された。峯次郎は息子の手紙だけは教え子たちからの葉書や手紙とは別に保管していたのである。峯次郎にとっても肉親からの葉書や手紙には教え子たちからのそれとは異なる特別な感情があったものと推察される。

(20) 「夢まで悲しい」(菊池敬一・大牟羅良編『あの人は帰ってこなかった』岩波新書 一九六四年、七二〜八五ページ)。

(21) 寛司さんと峯次郎との関係については、ゑんさんの末の妹のスエさんが峯次郎に嫁いでいた関係で、峯次郎は寛司さんが買い求めた仏教関係の本をよく読んでおり、寛司さんの影響を受けていたといわれている。当時、寛司さんは仏教関係の本を定期購読したり、お寺参りで京都などに行ったときに購入してきていたという。また、昭和六年、ワカさんが嫁いだ頃、菅沼家には水田が三町歩あった。もともとの元田(二町歩)に加え、寛司さんがよそから約一町歩買い求めて、増やしたものである。また、寛司さんは墓地についても、分家以来本家の墓地のそばにもらっていたが、「先祖があるから」といって共同墓地の一画に新たに墓地を設け、分家初代以来の先祖の墓も移した。寛司さんは婿養子として菅沼家に来て以来、土地の拡張や墓地の整備を行う一方、藤根村村長もつとめた人物であった。ワカさんが嫁ぐ二年前に寛司さんは亡くなっていたが、寛司さんが買い求めた本などはワカさんによって現在も小さい木製の本箱に保管されている。

(22) 岩手県とは別の例であるが、滋賀県蒲生郡竜王町島の松岡藤太郎さん(大正九年生まれ)は先の戦争で牡丹江近くのエッカに行った。エッカ病院では兵士ら八〇〇人が死亡した。松岡さんたちは「殉国の霊」と記した墓標を立て、仲間にいた僧侶によって「慰霊祭」(本人の言葉による)を行ったという。今、松岡さんは「生きてる者の義務として後世に書き残さねばならない」という。そこで、財団法人全国共生抑留者協力『シベリア強制抑留者の語り継ぐ労苦』(平成一〇年

度戦後強制抑留者に係る労苦調査研究受託業務結果報告書第一〇巻―①）に寄稿したところ、聞き合わせがあったという（二〇〇一年八月調査）。今でも戦死者の聞き合わせを行っている家族が各地にいるのである。

(23) 新谷尚紀「慰霊と軍神」（藤井忠俊・新井勝紘編『戦いと民衆』（人類にとって戦いとは3）東洋書林　二〇〇〇年。

❻資料紹介―兵士の手紙―

(1) 小原清止さんから家族宛の手紙一覧

（本文の番号下は葉書および封筒に記載された住所と宛名。（　）内は差出人の表記。本文中句読点および改行は筆者による）

1　岩手県和賀郡横川目村荒屋　小原博君　（弘前ニテ父より）

おかはりありませんか。私もかわりなくはたらいて居るから安心して下さい。毎日あそんで居る様だ。リンゴはずいぶんなって居る。くはしいことは書かれないから書かぬ。御前たちの体ヲ大せつにして居る様にして居れ。昨日セノもりの万作殿（筆者註　清止の従姉妹の嫁ぎ先の父）に合った。くはしい様子はきいてくれ。

2　大日本岩手県和賀郡横川目村荒屋清止方　小原コメ

今日十一日午前再度の軍装検査を終へ、午後から馬を汽車に積み八時頃出発の予定です。去る四日には第二大隊機関銃隊の兵士が機関銃を積んだ車に引かれて重傷を負て翌日五日朝死んだそうです。又盛岡出身の今度召集兵歩兵伍長は九日夜首を切て自殺した者もあります。やはり馬は地方から徴発した馬故、使には仲々骨が折ます。幸に私の馬は年より馬故楽なもんです。子馬を残して来た馬も沢山あります。私は小行李隊と云ふ隊ですから相当キケンです　歩兵のすぐ後約九町位の処まで行て玉を歩兵の人達に渡すのですから相当にキケンです。併し皆様の心が私を守て下さるし亦沢山の御守札も貰て居るから私は絶対に安全です。此方に来てからも隊からは明治神、岩手県からは県社八幡宮、宿からも一枚、家からの外に三枚も貰て居りますから決して心配することはありません。

部落の人達には出来る丈心尽くしをして決して恨まれ様なことをせずにね。父上も亦君も弱い体故充分注意して帰りを待て居れ。円治君（筆者註　清止の従兄弟）にも頼んで居るが博の教育はしっかりやれ。父の居ない後で今までより成績の下る様なことせぬ様にしてくれ。手紙を出す時は、弘前歩兵三十一連隊気附中村部隊井村隊特ム兵とかけ。兄弟達にも是れは知らせて置け。十一日午後八時頃出発して二日半日位で広島に着く様です。途中は合ふことは出来ますまい。何れ体はくれぐれも大切にしなさい。又途中からも出します。

小原清止さんから家族宛の手紙一覧

番号	宛　名	差出人場所	年月日
1	小原博	弘前	不明
2	小原コメ	弘前	S12.9.11
3	小原命助	秋田→京都	S12.9.13 消印
4	小原（家族）	広島	S12.9.13
5	小原（家族）	宇品→大陸	S12.9.16～
6	小原命助	釜山発	S12.9.21 消印
7	小原専三郎・命助	大陸	不明
8	小原コメ・政一	豊台→北平	S12.□.29
9	小原（家族）	北平→趙懸	S12.11.6
10	小原命助	支那	S12.11.8
11	小原コメ	支那	S12.11.21
12	小原博・節子	北支	S12.11.21
13	小原命助	支那	S12.11.30
14	小原コメ	北支	S12.12.27（旧11.25）
15	小原博	北支	S13.1.24 過ぎ
16	小原コメ	北支	S13.1
17	小原博・コメ	北支	S13.□.23（正月過ぎ）
18	小原コメ	北支	S13.（旧1.7）
19	小原博・コメ	北支	S13.1.29
20	小原コメ	北支	S13.2.22
21	小原命助	東羊市村	年月日不詳

十日

妻へ　　清止

3　岩手県和賀郡横川目村あらや　小原命助様

秋田ニテルリ子ニアッタ　ソレカラ　タカヨト六郎ニモアッタ　エチゴのおやしらず、子しらずヲ見テ今ハビワコノミヅウミヲ見乍ラ京都ニ行クト　　清止

4　大日本岩手県和賀郡横川目村荒屋清止方　小原

父上様や皆様は変りありませんか。私は次の様な順序で広島にきて居ます。弘前を十一日午後八日時五拾分発車でした。客車九ツ馬は約二十車位と思ひました。十一日は朝から雨降でした。頭からぬれて汽車に馬を積み終たのは八時半頃それから私と友方（筆者註　清止の親友）と二人で一ツ車の馬番をして行きました。客車よりは馬の方は楽にねることが出来たのでした。秋田駅に来た時思いがけなくルリ（筆者註　清止の妹）に会たので皆様が黒沢尻に出たのを聞きました。秋田からたかよに電報を出させたので新潟県の糸魚川駅で六郎とたかよ（筆者註　清止の妹夫婦）に合ふことが出来ました。会ふことが出来ぬだらうと思て居た。幸に此の駅で馬番の交代だったので自分の持物を持てる間にたかよに呼び出され全く夢の様でした。約二十分位停車あったので話が出来ました。時間になって別れる時には全く泣き出したくなったが沢山の兵隊の前で涙は見せられません。萬才の声は出せなかった。紙包を貰ふたが見るひまがなかったので今夜見たら千人針とキャラメルと仁丹でした。次に汽車から見て行たのは越後の親シラズ子しらずを見て富山駅に七時半に着きました。此処では婦人方が駅に出て御茶やら水やら薬（仁丹）をくれました。ツルガには前三時二十五分、米原に五時半、朝早く（ビワコ）を眺め乍ら朝食をして草津、大津、京都、神戸、明石と進んで行きました。

アカシでは有名な瀬戸内海を見て姫路、広島に着いたのは午後六時四十五分でした。それから馬屋に馬を入れて休んだのは十三日朝四時、一晩中馬を手入したり荷物の整理したりしたのです。今日は一日ゆっくり休めるのです。併し家に居れば手拭一本洗たことなかったが今ではシャッチやモモヒキを全部洗濯です。

此処まで来る間に田、畑、山、草刈、道を通る人、老も若きも女も歩ける位の子供さんまで皆手を上げ又日の丸の旗を振り乍ら萬才をせかんで私等を送てくれるのです。山形県を通る時、田の中で頭のはげた爺が草刈カマを振りまわし乍ら萬才をしてくれた時は全く涙が出ました。今頃は父も此んなにしてるのか思わるともう其処に居られず便所に行て暫く涙の止まるのをまって居ました。又小さい子供達や博位の奴等見ると何日も胸張りさけるようです。然し今は何と思ても仕方ありません。家を出る時云ふた如く僕の身をば決して心配せずに皆様の体を大切にして居て下さい。私は丁度浦島太郎の様に近所の方々がかわってしまふまで帰られないか知れません。特ム兵と云ふても兵隊さんの一人故に此の度は皆が見られない処遠い支那までも見ることが出来るのです。此れも皆天子様の御蔭と父母の恩とです。先日ルリに頼んだ金は旅費として隊から四円二十二銭貰ふたのと給料とを合せて五円送たのです。此の内からタカヨに出した電報料を何程か引かれたでしょう。私は大した金は不要だから何日でも月五六円位は送る考をして居ます。

次に横川目駅を通る兵隊さんのある時は必ず必ず駅に出て、見送りしなさい。知らない者でも多数の人達が出て居らるると元気が出るよ。きっとわするなよ。又出征兵の時も必ず出る様にね。十四日頃出帆らしい。私に来る手紙には三十一連隊気附中村部隊井村隊本部として下さい。手紙もあんまり出し苦しいから兄弟達に廻して見せて下さい。

十三日

家内一同へ　　広島ニテ

5　大日本岩手県和賀郡横川目村荒屋清止方　小原

変わりないでしょう。私も相変わらず当地に無事に到着致し居りますから御安心下さい。前に知らせた様に宇品を十六日午後出発致し、夜中は舟にて瀬戸内海を通過致し十七日午後六時半頃着きました。夜故に上陸は致しません。

夜中舟で暮し翌朝五時から上陸を始め、私等は九時頃上陸致しました。（赤い夕日）と云ふ唱歌にもある様にゲンカイナダを通る時は相当に海は荒れました。舟には茂治、九郎、喜兵衛、長作、甚四、其の他村の人達は沢山来て居ました。皆で一千三百人も居ました。此れと同じ舟は一緒に三ツも出ました。私の居る舟の人は半分位はよってしまったが私は平気でした。それだから馬屋には折角行て、馬に食せるやら弁当を持て来るやら働きました。舟に長く乗たのは始めてでしたので海の眺めは実に面白いのでした。波の上を飛魚が沢山飛んだり又大きい魚が波の上を走ったり実に面白かった。

宇品で舟に馬を入る時は小さい舟に十頭づつ入れて運びました。馬は平気のもあれば亦非常に暴れるのもあった。機関銃隊の馬は一匹海に落ちましたがすぐあげました。舟の中では馬も相当ヨッタのもあります。舟に乗た翌日の中食の時などは麦を食はぬ馬が半分もあった。十八日朝上陸する時は亦舟から小さい舟で陸に運びました。朝から雨で体中まるぬれでした。雨の中を約一里位の処を引いて馬繋場に入れ終た時は後一時でした。その時雨は晴れたのです。外で中食をして町に来て宿舎に入たのです。

町は山に建てた処故に段々になって居ますが大変に大きい町です。皆日本人ばかりです。人は亦五萬人もあるそうです。日本の町中でも五六番なそうです。

馬繋場には大した馬です。黒沢尻セリの時の十倍位も来て居ります。どこからこんなに集めたかと思います。何処の兵隊の馬だか知れませんが、今夕方一匹死（ん）で居たのもあります。舟でけがをした馬も相当あります。私等の馬にはけがはありませんでしたから安心して下さい。今日支那に出る兵隊も沢山あります。私等も明日頃出発するらしい様です。何回も云ふ様に私は案ずることはありませんから、体を大切にして暮して下さい。しばらく手紙は出せません。近所の人達にも出せませんからよく話して礼を云ふて下さい。

十八日夜

（姉達や十六石、西にも見せて下さい）

6　岩手県和賀郡横川目村あらや　小原命助

二十日午後十一時半釜山発某地に而て行進中、四、五日にして予定地着。其の時亦便りします。車中ニテ

姉達や親類達十六石（筆者註　妻コメの実家）に聞かせてくれ。

7　岩手県和賀郡横川目村あらや　小原専三郎様、命助様　（清止）

一寸　五半　出般、元気で当地安着致し候。海上にては全員の七割位倒れ、馬当番や歩哨は元気の良い人で、交代なしにやる様な状態に候。舟中にては村の人七八人同舟に候。十七日後□着陸致し候間、他事乍ら御安心被下致候。

奨君にも聞かせて呉れ

8　岩手県和賀郡横川目村荒屋　小原コメ殿　（天津ニテ清止）

かわりないか。私もげんきで居るからあんしんしてくれ。家の方にも馬をちょうはつがあったり又しょうしゅ（召集）されたりしたそうですね。くにのためだからしかたありません。イネかりもしまったらう、ず

いぶんつらいこともあらうが、がまんしてくらせ。博もだんだんにやくに立つだろう。つづ（地図）を出して見なさい。私は釜山ト云ふ所から新の廿日の夜十一時出で京城新義州。奉天、天津と云ふ所をすぎて今はペキン（北京）と云ふ所に行くのです。

廿一日のばんからつづいて汽車の馬屋ばんをして今夜で四ばんです。馬はをそろしくはありませんが夜るねることが出来ないのがこまります。釜山ではちょうど旧の八月十五日でした。ちょうせん人はこの日からおぼんだそうです。さまざまのきものをきた人は町の中をぞろぞろあるきます。キシャで皆の見ることのできない所を見るのもをもしろい。ちょうせんは山が多いが、まんしゅうは平地だ。ブダをたくさん連れてあそんで居る人もある。シナは又平地だ。山は少しも見られない。シナの子供はキシャのくるたびに来てベントウカラをヒロッテ行ってめしのついてるのをくうのです。かわいそうな所もある。今日、天津と云う所でセンソウでケガした人たちは五、六百人と死んだコツをのせたキシャにあった。あんまりよいきもちはしないヨ。あたま、足、手、ほうたいしてるかんゴフがついてるのもある。私もこんなことはカクゴしてるから私はあんずるな、お前たちばかりからだをたいせつにして居てくれ。

豊台（ホウダイ）と云ふ処から北平（ペイピン）と云ふところまで来て居ます。廿六日の朝八時出で十一時三十分出発、ペイピンニ六時着きました。みちは四里位のところでした。シナでもよいほうの町ですが全く汚い処です。自動車は少ししか見へません。日本で持って来た軍用車が見へる位です。人力車は並通です。市内は五銭で乗れるそうです。市街両側に内地のカメヤキ様な物、カントウ豆、ナシ等を売る人は歩くに困難の程並んで居ります。汚いことは話になりません。市の周囲は煉瓦で造らへたヘイでまわして居ります。門は日光で見る様な美しい造へかたです。私等今の愛馬の手入をする外、乗馬運動で市内を歩く位で弘前に居た時より勤ムは激くありません。第一線（戦闘）には出るかも知れませんがまだ三、四日位あるらしいです。

毎日飛行機が飛び過て居ります。廿六日には野砲の音もしました。昨日（廿八日）には歩兵の九中隊の人が演習から帰てから銃の手入の時弾丸を打た人があるし又演習中にスネを折た人もある。天津で日本兵のケガ人五百名位と骨四百位と来た汽車に会たが死とケガを覚悟して来たことだが余り良い気持ちをしなかった。若し話の通り三四日で戦闘に参加したら手紙は出せませんから、其の時は便りのない時は元気で居ると思て居て下さい。御身大切にして家内のことは操り事乍ら宜しく願ます。

廿九日

政一様（筆者註　清止の妹の夫）　　清止

9　大日本岩手県和賀郡横川目村荒屋清止方　小原

拝啓　私事無事にて北平を七日午前七時出発、毎日行軍で只今は趙縣と云ふ処に来て居ります。道順は北平、古城鎮、除水、保定、定縣、正定と云ふ様に進軍しました。今日（廿二日）は滞在です。趙縣と云ふ処は正定から六里も離れた部落です。是れからは愈々第一線に向て行軍だそうです。此処まで来る途中、支那兵、土民等日本軍馬の死体は路辺にあること実に多数ありました。腐れて骨ばかりの馬もあれば足がきをしたあともある死馬もあります。十八日正定から来る時は砲声もしました。亦、鉄橋も爆破されて居る処もあり　其の橋の中頃に汽車も交て五六時間位です。道はまるで土煙で向の人の姿は見えぬ様な時もあります。横川目から私等の後に召集（に）なった人達にも合ひました。私等ら連隊中三大隊に伊藤實、オソヤシキの人、又今日は藤根の高藤医者にも合ひました。高藤様の話に依れば（井隆）では千人位の負傷者は出たそうです。

私は第一線には出ることはないだらう。今度の行軍も戦闘に参加する

筈でしたが、もう「大源」も落ちたらしい様子ですからもう行くことはありません。もし戦闘に参加しても家の人も諦めて居るだらうし私も決心して居るから是れも天皇陛下のため、亦祖先のためですから、こうなるのも前世の約束ですから致しかたありません。私も決して死して帰ることありませんから、心配せず家のことは皆で協力して暮して居て下さい。

金も一ヶ月八円二十銭貰って居るが何も買ふこともありませんが、家に送るにも送られず、ふところに入れ居ります。其の中に送れる時は送ります。書きたいことは沢山ありますが亦後で書きます。而し様子が変（っ）て戦闘に出れば出せませんから、皆様元気で暮して下さい。何事も仏と神の力です。

十一月六日

家内一同江　　清止

博によく注意して教育して下さい

10　岩手県和賀郡横川目村荒屋　小原命助様　　（支那　小原清止）

取急ぎ御知らせ致します。私等は本日午後一時、石家荘から汽車で南の方の順徳と云ふ方面、戦争に行くことになりました。皆様は元気で暮して下さい。私も覚悟の上ですから、もう私のことは心配して下さるな。決して不名誉なことは致さず立派に国家のために働きます。皆様に頼んで子供等の教育をして地方から後指をさゝるゝ様なことをせずに下さい。後は手紙は出せぬかも知れませんから、皆様元気で居て下さい。何事も前世の運命と諦めよ。

十一月八日

父上様

家内一同様　　清止

11　岩手県和賀郡横川目村荒屋　小原コメ殿　　（支那ニテ　小原清止）

お手紙ありがとう。うれしくよみました。皆元気で居るそうで安心しました。私も元気で居るから安心してくれ。送（っ）たものはまだうけとりませんが近いうちには来るだろう、それをたのしみにして居ます。何もそんなに心配することはなかった。毛糸のちょっきもあるしどうまきもある。寒いことなどはなかったのにすまない。これからは何も送ることはないよ。

次にシャッ金の方はどうなった。とみぢ殿（筆者註　高利貸し）には政一、奨（筆者註　隣りに住む友人）、円治さんたちにそうだんしてはらってをくようにしてくれ。それでも米があまり出来ないようだらそのままにしてをくように、みんなにねがってもらい、なるべくまけてもらいなさい。町の方はどうなった、知らしてくれ。

去る九日十日十一日と三日間いくさをした。私もでたが少しもけがはせんから安心せ。これからもなんかいも出るだらうが心配はするな。横川目の人では春吉一人だ。死んだ人も二十人位はあらう。みんながかくごして居ることだから、私の身はけっして心配するな。家のことだけたのむ。亦、次ニひまがあったら手紙を送ル。今は二三日前から休（ん）で居る。

十一月廿一日

こめ殿　　清止

姉達ニ元気で居ることを知らしてくれ

12　大日本岩手県和賀郡横川目村荒屋小原清止方　小原博君

（北支下元本部中村静部隊井村隊小行李小原清止）

博君元気で居るでしょう。父も元気で国のために働いて居るから安心してくれ。おぢいさんやお母様の言付を守てよく勉強して居れ。出世をするには勉強する子供でなければ出来ないよ。何事にもよく注意しるよ

うにせ。支那のキッテを二枚送ル。学校に一枚やれ、一枚は君がもって日本のキッテとどこがちがうかしらべて居れ。小さい子供はいぢめなよ。

博君　　父より

セツ子サン　大キクナッタロウネ　父サンハゲンキデイルヨオカアサンヤオヂイサンノオシヘヲキイテ　ヨリベンキョウシテイナサイ　ツイシンボハミンナ甲ヲモラッテイナサイ　オ父サンハイマスコシ　タッタラカエルカラガッコウニイッタラ　センセイノオシヘヲヨクキイテ　ジヲタクサンオボヘテイルヨウニセヨ

十一月二十一日　　父ヨリ

セツ子サン

13　岩手県和賀郡横川目村荒屋　小原命助様　　（支那ニテ一息ヨリ）

私等は元気で服務致し居りますから御安心下さい。現在は甕鹿縣に来て居ります。戦闘の跡を眺め乍ら行軍です。第一線に出る様なことはない様ですから心配無用です。気候は日本の九月頃です。支那の国は全く広い国です。今までの行軍で山は見へません。今晩の宿営地の西方に山を見ました。当地に今日は滞在です（十一月三日）。私等は今後の活動状況不解です。元気で居る、心配するな。

14　大日本岩手県和賀郡横川目村荒屋清止方　小原コメ

かわりないか、私も元気で居るから心配するな。黒沢尻の方はどんなにしたか。又富治の方もどうしたか心配して居る。一人で家のことをみんなやって見たらずいぶんなんぎだらう。私等もあまり長くはこっちに居ることはあるまいと思ふからがまんしてまって居るようにたのむ。

今年は米もたくさん取れただらう。役場から銭はもらって居るか、もらわれぬならば小使はなくてこまって居るだらう。私も送（っ）てやりたいが、何日も郵便局がないので送られず持（っ）て居る。こまって居るだらうと思てもしかたない。

小包は今日きた。有難かった。シャシンも見たがずいぶん心配かををしてるな。私の出した手紙はキンジョの人たちにとゞかぬか、さっぱり手紙は来ない。父からとお前からと十六石から二本、たかよから一本（廿五日）又お前の一本と六本しか来ない。今からはテツドウのそばに来てるから手紙は早くもらへるだらう。私も時々出すから、家の方からもほしい。

雪はどの位ふった、こっちは少しもない。土けむりが立てあるくにこまる。ただ夜はずいぶんさむい。でもまだ風ひきもしないから心配するな。みんなからだをたいせつにして居るようにしろ。いくさのもようは、しんぶんを見る人からきけばわかるだらう。これからはひまがあるかと思ふから時々手紙を出す。十六石の父母はたっしゃか、良一兄は妻をもらったか。主計は三月まんしゅ（う）に来るそうだな。寒いところらしい。良一兄も心配して居るだらう。なぐさめるやうにして居なさい。妻も早くもらうやうにしたらよいと思ふ。からだ（だ）け丈夫にして居なさい。

十二月廿七日　　旧十一月廿五日

15　大日本岩手県和賀郡横川目村荒屋清止方　小原博君

（北支下元本部中村静部隊井村隊小行李　小原清止）

皆さんがカゼを引（い）てねて居るではありませんか。父は元気で居るから安心してくれ。父のシャシンが届たか早くへんじを見たい。

何日も云ふ通り良く勉強して先生からもほめられ又立派な人になる様にせよ。父は一月七日の命令で兵士が七十六人の中第三番目で一等兵となったよ。よろこんでくれ。それから一月廿四日には天皇陛下からタバ

コをもらった。家に行くまでのまないで行くからね。

手紙を時々書（い）てよこせ。手紙も上手になるんだし又作文の練習にもなるんだ。せつ子にもよく字を教へなさい。それから六年生の女、武田フサ子、小原キヨ、名須川ストミの三人から手紙をもらったので私は十二月廿八日に返事を出したったが、届いたかきいて見てくれ。何回も云ふがよく勉強して六年になる時優等生となる様に心がけよ。正月で遊んでる時も自分より少い子供や弱い子供はけっしてイヂメルなよ。

16　封筒なし

此の手紙の見る頃はお正月のことと思ふ。ちかごろは家の方のことでかわつたゆめばかり見へる。何もかわらないか。私は何日も元気だ。先日源吉、徳四郎に子供の兵隊に行くことを祝たことを手紙をやつた筈だったがとどいたかとどかぬかをめよからきいてみる。また又一には荒屋の人達皆にきかせてくれと書いて十一月七日と一月になてから出していた。これもとどいたかをめよにきいてもらひなさい。私の一等兵になったことをまだだれにも話さずに居ルやうにね。博にもきかせてくれ。

17　大日本岩手県和賀郡横川目村荒屋清止方　小原博君

（北支下元本部隊中村静部隊井村隊小行李　小原清止）

かわりないだらうね、私も元気です。十九日ルリとはまに手紙を出した。其時家に届ける物を入てやった。受取（っ）たらしまってをけよ。キネンになるもんだからね。十九日お前と子供らにも出したからね。又廿三日正行とお前にも出したシャシンは茂治（筆者註　妹ルリの夫）と一しょに送（っ）た。受取（っ）たら返事をくれ。又此れは正月二日に名古屋から来たイモンヒンに入（って）たエハガキだ。チョウセンのチャヤ女のもんだ。なくさずにしまってをく様にしなさい。

廿三日

なつかしき妻へ　　夫より

18　大日本岩手県和賀郡横川目村荒屋清止方　小原コメ

かわりないだらう、私も元気で居るよ。此方はずいぶ（ん）暖かくなった。日中は外にもねるにも寒くないようになった。家の方はまだ雪がふって居るだらう。フキも毎日フイて居るだらうと思てる。博や節子も元気で学校に行（っ）てるだらう。

何日もなら今日あたりは毎日酒のみをしてる時だね。今日は旧の正月七日だね。私等も此の間は毎晩酒をもらってのんでる。昨日慰問袋をもらった。今度私のもらったのはあまりよいもんでなかった。外の人にはカミソリ、サルマタ、テチョー、テヌグイなどもあった。

此のあいだは手紙はこないね。風（カゼ）でもひいてねてるではないかと心配してる。私等は毎日あそんで居るやうなもんだ。近いうちに亦遠くの方に行くらしい。

此の前に言た○○をこしらへてをいたほうがよい。此の頃の話ではあんまり長くない間にかへれるか知れないもようだ。早くかへって三三の祝とガイセン祝と一しょにしたいね。私等のもちものは隊からもらったもののほかはみんなはこに入れてつつんでしまった。元気を出して風（カゼ）などひかぬようにせ。病気になったらすぐイシャに見られるようにしてね。子供達にはよくチュウイして勉強させなさい。手紙も時々かいてよこすようにね。手紙をかくうちにツヅリカタガ上手になるんだからとよくをしえて毎日出してもよからう。かねぞう、キヨシ、長左エ門の方は何とした。ススムにもずいぶんめいわくをかけてるだら、土堀や西では春になったら家のフキガヘをするか、それまでにはかへることが出きるだらうと思ふからね。でもつクかつかヌか又かきかせてくれ。必ず○○はこしらへてをけ　よくきをつけてね。一人で出来ないだらうから十六石の兄とそうだんをしてね。よくキヲつけないとこまるよ。

からだは大事だからね。喜代松（筆者註　コメの兄）には私がまだ手紙は出さないがお前から出してをけ。私が元気で居ることをね。十六石の父母も元気だらう、よく話してきかせるようにしなさい。

旧七日　　清止

妻へ

要之進や円治は何としたか知らしてくれ

19　大日本岩手県和賀郡横川目村　小原清止方　小原博君

博、かわりないか。父も元気で居るから安心してくれ。雪がたくさんふったそうですが何尺位あるか学校に行くにひどい日あるだらう。けれども毎日元気で行て勉強しなさい。日本の国に生れた子供は幸福だよ。支那の小供等は学校に行て居るのは少ししかないよ。日本では子供の時から皆勉強してるから立派な人ばかりたくさん居る。それだから何日どこの国と戦争をしても勝つのだ。しっかり勉強してエライ人になるように心掛けなければならないよ。

御祖父様の云ふことや母様の云ふことをよく守（っ）てね。又セツ子のもよくかあいがって、知らない字は教へてやりなさい。お前達が級第して通信簿をもらうまでにはかへるかも知れない。通信簿はみんな甲をもらうように勉強しなさい。

支那では今日（十七日）雪が三寸位降たが夕方にはきえてしまった。春のように暖だ。牛の小さいのを養て居るそうだね。うんと物を喰べさせて大きくしてをけ。春、田を掘る時や田植えの時に使ふようにね。元気で勉強をしなさい。父は支那に来てからは馬をひかないでテッポーを持て他人の世話をして歩て居る。戦の話は帰てからきかせませう。

かはりないかね、私も変りなく元気で居るから安心してくれ。かねぞう、清、長左門のことはまだきまらないと奨から手紙が来たがまだきまらないか。黒沢尻ケイサツの部長が来てるから話して見てケイサツをたのむかも知れない（奨にもこの話はしてやった）下村の円治は家に居ないが何かイ手紙をやっても返事はこない。番吉、栄一もまんしゅうに来たらしいが合ふことは出来ない。手紙は番吉から二どきた。それに返事も出したし栄一にも手紙はやった。

良一（筆者註　コメの兄）は妻をもらったか。十六石の父母は病気をしないか。兼八はかへ（っ）たか、喜代松兄（筆者註　コメの兄）もかへッたらしいがほんとうか。私も三月のはじめにはかへるかと思て居る。主計君（筆者註、良一の長男）は何月何日家を立（っ）て行くか知らしてくれ。かへった時使ふ酒を家でこしらへたらよからうと思ふ。お前一人ではめんどうだらうから十六石の兄に話して手つだってもらってやりなさい。いツものかめで二ツ位あったらよからうと思ふ。出来るだけ早くやてをきなさい。

たツシの居たところしっかり書てよこしてくれ。正月八日から町を出で、七里ばかりの山の中にヒゾクセイバツに来て居る。廿二三日にならないと町にかえらない。シャシンをとったから送（っ）てやる。よわいからだだが病気をせぬようにしなさい。

20　岩手県和賀郡横川目村荒屋　小原コメ様

手紙ありがたくよみました。九日と十一日とに出したのが二本今日（廿二日）もらひました。今までは町から七里も山をくに行てヒゾクセイバツをして居て今日かへって来ました。　来てみると今までの話はすっかりかわって居りました。いくさもしまったと思て居たが今度は又山をくの方にいくさに行くやうな話です。三月ごろかへるによからうと思て居たがだめだ。今年中はかへれぬと思て居ればまちがいなからう。シナの様子を聞きたいと云ふたとて何もあるまい。今までに知らせた通りだ。今度のヒゾクセイバツには何もをそろしいことはなかった。十五

日かン毎日ねたり、支那の子供をカモッタりしてあそんで来た。くしガキ、ナシはあきるほど食て来たよ。正行から金サキ八まんの御札を送てもらった（十九日の夜）。お正月にはもちは四合位ツツ食た。内地から丸くこしらへてはこ入にして送て来たのでした。酒も来た。其の中に天皇陛下からもらったのも少しあった。くりやスルメはくミの人十二人で食べた。友方にはたばこをやった。茂治、九郎にも少しやった。

ヒロサキの宿から私らの取（っ）たシャシンが来たか。こっちでうつしたシャシンを送るから姉さんたちにも見せてくれ。前の茂治、九郎、タツカメノハバの初太郎、後のはタツカメノ甚十郎のモゴ、順三郎、私と下村の伊兵衛の弟マサトと七人だ。私はずいぶんフクレてるね。心配顔も見へるやうだね。笑（っ）て見てくれ。

次にノ中のイシヤには何もあるはづはない。修の見られたのがあるだけだが、あれははらってしまったはずだ。そんなことはあんまり心配せずに居たがよからう。荒屋コー中一同どして、久一あてに二本出して居たが、とどいたらうか

又さけのことは見あわせてくれ。かへるもかへらないも今十日位でわかるだらう。今年の新年会は家でやるようになってるはずだ。私が居なくともやってくれ。お前の三十三の祝は私が行てからやるやうにね。ホオンコー（報恩講）やったら父もよろこんで居たらう。お前だけ心配かけるね。しかし国のためだからね。しごとをする気で居て病気になるなよ。それは私にの一番のつとめ又国のためだ。又あとで知らせる。

廿二日夜

シャシンは茂治ト一ショニ入リ　受取タラヘンジヨコセ

21　大日本岩手県和賀郡横川目村荒屋清止方　小原（父上）

（北支　山下兵團　中村静部隊井村隊東部特ム兵）

（前欠）ブラ下て居ります。亦、部落に依っては湯茶を出して飲ませる処や甘藷の煮たのを出して食わせる処もある。道はまるで土煙の上る処と車の埋まる様な処で石などは一粒も見られません。元気で居るから心配せずに丈夫で居て下さい。

廿二日　東羊市村ニテ　清止

（近所の方や姉様達に宜敷）

父上様

菅沼義平さんから家族宛の手紙一覧

番号	宛　名	差出人住所
1	菅沼五助	盛岡市東部第70部隊友永隊（き）
2	菅沼ワカ	満州国東安省虎頭第5244部隊嶋谷隊牡丹江第20軍事郵便所気付
3	菅沼ワカ	満州国牡丹江第20軍事郵便所気付満州城第5244部隊嶋谷隊
4	菅沼ワカ	満州国牡丹江第20軍事郵便所気付満州城第5244部隊嶋谷隊
5	菅沼ワカ	満州国牡丹江第20軍事郵便所気付満州城第5244部隊嶋谷隊
6	菅沼ワカ	満州国牡丹江第20軍事郵便所気付満州城第5244部隊嶋谷隊
7	菅沼ワカ	満州国吉林省公主嶺満州第8部隊高橋隊
8	菅沼ワカ	満州国錦川省錦川第8軍事郵便所気付満州第2部隊桜田隊中島隊
9	菅沼ゑん	満州国東安省虎頭軍事郵便所気付　満州城第5244ノ嶋谷隊
10	菅沼寅男・ゑん あき・ぬか	満州国東安省虎頭軍事郵便所気付　満州城第5244ノ嶋谷隊
11	菅沼寅男・キサ 清・光子	満州国牡丹江第19軍事郵便所気付満州城第5244部隊嶋谷隊
12	菅沼五助	比島派遣威7260部隊木内隊
13	菅沼ゑん	比島派遣威第7260部隊木内隊

(2) 菅沼義平さんから家族宛の手紙一覧

(すべて年月日不明。本文の句読点は筆者が適宜補足したもの)

1

恙なく入りました。御安心下さい。
診てもらいまして大丈夫であります。
元気良く毎日を過してゐます。
お婆様には体を大事になされて下さい。
清君へ
まじめにべんきやうするやうにせよ。家へかへつてからも、父さんが、おまへにいいつけたやうにやりなさい。先生にもたのんできたからしつかりやりなさい。又後便にて。

2

御手紙ありがたく拝見いたしました。家の辺りの近況は変った所もありますね。稲作、平年作くらいには行くとの由安心いたしました。前田も今年は実入りは何らでしたらう?家のあたりの人々にはハガキを出したが、その人々から皆んな返事をもらってうれしかった。くる前にとった写真を□□で送ってください。おおきかったらすつかり袋に入れて開封でよいのだから出して下さい。掘之内では男の子を産うけた由、康志さんも喜んで二人でお祝をやりました。又、村の様子をおくって下さい。

3

先頃、送れと云った物を至急だしてくれ。その外、着る物などは全々送るな。クツ下、手袋、何んでもいらぬ。キャラメルと図蓑と一緒であるなら、菓子がとけても皮にしみない様にたのむ。

二月四日

4

拝復　御婆さんを初め家内皆んな豆しい由安心いたしました。小原の差葺も終り稲刈も大分になった事と思います。外の人の手紙では五分作とか、七分作とか云ってゐるが、家の事も正直な処何の位だか、光子ハ丈夫との事、御婆さんは毎日スゴあみの由御金をためず、御菓子でも食べる様に云ってくれ。先頃の小包はほんとにありがたく頂いた事もだ。写真も見た。曲屋敷の父さんは困ったね。中級徴章ハ虎男ハ学校からもらふだらう。その検査で合格しなければ服にもつけられぬものだ。各物ハ何もいわぬ。あまり、物があると困る。隊から渡るものばかりでも澤山だから。誠の所へ武君、良吉君、国五郎君とゐる。去る十二日ハ我隊の慰安会あって、余興もあって、面白かった。

5

御婆さんを初め家内中まめしくて働いてゐることと推察いたします。俺も変りなし。稲刈ハ何の位になりましたか。小包の件、まだ送らないでゐたら、お守入(リリアであんだもの)を入れてください。手拭いある、買不によい。お守入れハただ強い封筒に入れて曲に出してもきます。フサ子からも手紙をいただきうれしく見ました。誠の方へ武君、国五郎、良吉君が□ってゐる手紙が来ました。

(絵葉書の面)

色々と美しい満州風景も見えすし、そちらはもう稲刈も始まるかと思います。それらの額は少ないとの事、本当に困ってゐるやうです　それではまた元気に働いて下さい。

敬具

6

十一日にて差出しの小包、本日正に受領いたしました。安心下さい。四色共何の変りもなく豆で届きました。

誠からも度々便りあります。スワ町の父様（イネ子の）からも小包を送られたとのことです。今は稲こき盛んでせう。御婆様や御母上様にもよろしくたのむ。

7

月日の経つのははやいもの、早や五月となってしまった。もう、このハガキの届く頃は田打も終ったころか、又は田こなしでも始まってゐるだらうと思ってゐる。今年の田打始めには馬ならしは何らでしたらうか、お父様も田にあったでせうね。

当地　天長節には営庭に整列して遙に拝み式を行った。次の日は清国神社大祭の最後の日、隊では割かんな演芸会あり、久し振りでとても面白かった。御婆さんにもよろしく。

8

六月二十三日の手紙、本日届きました。今度、隊が変った為めにこんなにしばらくかかったのだから、これからははやいことと思ふ。田植も近所の人達に助けられて終った由、仙台の方は遅かったんだな。かへって遠くの人よりは植なをしがかからないで良かったんでせう。今では二番除草も初まってゐる頃か、写真を見ました。子供等も大きくなった様だ。今度は光子はよくとれました。清もうごいたな、山母みたいなのもゐた。早いもの去年の今日は盛岡に入った日だ。盛岡では榊さんに随分厄介になったけ。俺は今少しでよくなったら康志さんの所へ行くのだ。安心してくれ。冬、とって送った俺の写真余りがあったら一枚手紙に入れて送れ。子供等や何かに気をつけて、まちがひ起こさぬ様に。

9

御婆さん其後は達者ですか。あまり働いて体をすてない様に御気をつけられ下さい。外の兵隊ハシャツや胴巻、チョッキ等を送ってもらいますが、私ハ来る時もってきたので都合がよくあります。康志さんと一緒の所にゐます。男の子で喜んでゐます。又後で。

10

御手紙ありがたうございます。
満州も春の暖かさとは云へ時々寒くなったりします。
イネ子様がスルメをおくってくれたと手紙にありました。
百姓もだんだん忙しくなってきたでせう。元気で働いて下さい。
清も新しい帽子をもらってさうだね。

11

家ではコガをふいたさうだね。よかった。今は農家も忙しいだろう。二人とも最後の学問だ、今一回やりなほしたいとて後悔はできぬぞ。寅男も随分字も文もうまくなったね。し人間は磨けば光るものだね。キサ子も女としては上手だ。フサ子やハツ子は学校に入るとか、君は手伝ってくれ、飯も焚くとか、家の人達もどんなによいか。清はあんまりあばれたり、いたづらはやるなよ。今に俺が帰ったら許さぬぞ。俺の事は心配せずもよいよ、ずんずんよくなるから。□□症ですから。恥づかしい事はありません。御父さんもほんとに骨を折るだらうね。御母さんも無理して又悪くならぬやう祈る。御婆さんによっく読んできかせてくれ、手紙ありがたかった、あの歌は。

12

その後は長らく御無沙汰致し申訳ありませんでした。皆々様には定め

し御壮健にて秋の収穫に多忙なことと遠察申上ます。御婆様には御変りなく御働きですか。盛、光子等の子守にて御苦労様です。私も途中恙なく元気にて表記に到着いたし服務いたし居ります故、他事乍ら御□心ください。当地は年中夏の国です。今が一番寒い時なさうです。それでも蠅は澤山居り、夜蚊や蛍が飛んでゐます。バナナや椰子の実などあり食べられます。

村から一緒に来た者、七三、克巳、石田、松沼（長沼）、権蔵？等皆んな元気でゐます。今が丁度御七晝夜の頃と思い此の手紙を書いてゐます。黒沢尻の御□もぢきですね。家の仔馬も大きくなったでせうか。ニハトリは卵を産ミますか。供出米は完納したでせうか。

清君に　清君二学期もなくなる所ですね。大いに勉強しましたか。よくお母さんの言いつけを守り勉強したり手つだいしたりするのですよ。通信簿がきたら何が良とか優とか書いて此のハガキのとり返事を出して下さい。家の方にて変ったことは何か知らせて下さい。皆様寒くなる折柄御身大切に、サヨナラ

13

その後御婆様には御変りありませんか、御伺い申上ます。定めし御達者にて御子守やら何かにとほんとに御苦労様です。随分長らく御無沙汰をしましたが、これが最も早いつもりの便りです。今は黒澤尻のお□の頃でせうね。稲扱きもすつかりと終ったでせう。今年は収穫もあったでせう。供出米の方は何の位でせうか、御知らせ下さい。この便りの少し前にやはり飛行郵便を出しましたが、私は途中恙なく表記にて服務いたして元気にてゐますから御安心下さい。御婆様は七十六になる処ですが、まだまだ元気にてゐて下さい。そして必ず御婆様の御顔を拝見する日のあることを信じてゐます。御友達の鍋倉の人や熊□カネ様等皆達者…か。家の方にて何か変ったことがあったら此の便りの返事…知らせて下さいませ。堀之内へも便りを出せずにゐるからよろしく伝えて下さい。康志様はまだ帰りませんか。清水の…様は何のですか、御知らせ下さい。右一報まで

（3）菅沼義平さんから高橋峯次郎宛の手紙一覧

（本文中句読点および改行は筆者による）

1　（S8・6・11）

岩手県和賀郡藤根村

帝国在郷軍人会藤根村分会長

高橋峯次郎殿

拝啓　今般入営ニ際シテハ全ク農繁期御多忙中ニモ不拘御見送被下剰ヘ多大ノ御餞別御恵与被下誠ニ有難ク奉多謝候　途中無事左記部隊ヘ繰入相成候間御休心被下度候

茲今一意専心軍務ニ服ス可倍心ノ御指導ト御鞭撻ノ程願上候

右不取敢御禮旁々安着御報知申述候

昭和八年六月十一日

東京市赤坂区近衛歩兵第三聯隊　三班

機関銃隊　菅沼義平

2　（S8・6・18）

岩手縣和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

外家内一同様

承れば伊藤君には補欠入営にて来る廿日入営の由ですね。入る部隊は

何処でありますか。一寸御伺ひ致升。
扨て、早や入営後八日間も暮れんと致して居ります。今は余程馴れまして、様子も分るやうになって来ました。今日は引率外出で、午前八時頃出発して乃木神社、憲法発布記念堂、宮城、赤坂離宮、日日谷公園、日枝神社等見物致し、午前十一時頃帰営致しました。今は執銃教練も大分進みました。
時節柄御身大切にして下さい。度々御便り願ひます。
東京市赤坂区近衛歩兵第三聯隊
機関銃隊第三班　菅沼義平
六月十八日

3　（S8・8・15）
岩手県和賀郡藤根村後藤
高橋峯次郎様
東京近歩三―MG五
菅沼義平
八月十五日

其後お変りありませんでありますか。私は一期野外検閲も了りまして帰る十五日の夜行で午前一時乗車四時頃には品川着であります。菊池や伊藤とは何時も会てます。先づは
車中にて

4　（S8・盛夏）
岩手県和賀郡
藤根村帝国在郷軍人分会藤根分会長
高橋峯次郎殿

暑中御伺
平素は打絶へ御無沙汰致居候貴家御一統様の御健勝を祈上候。以御陰様私も壮健にて日々軍務に精励致居り候間、乍他事御休心被下度候
先は不敢御挨拶まで
昭和八年盛夏　敬具
近衛歩兵第三聯隊機関銃隊五班
菅沼義平

5　（S8・9・24）
岩手県和賀郡藤根村藤根字後藤
高橋峯次郎様
外御家内御一同様
東京近歩三MG5
菅沼義平

拝啓
長らく御無沙汰致し申訳ありませんでした。皆様には御変りなく御暮しでありますか。御伺ひ致します。降りて私も元気にて服務致して居りますから御安心被下さい。次に本年の徴兵抽籤の結果は未だ判らないでありますか。判った時は御迷惑乍ら御一報を願ひます。
私等は今度去る二十二日御守衛の査閲がありました。今後は御守衛の重き任ムも務めさして頂けるのであります。来る二十九日より十月十二日迄下志津に出張演習であります。　先づは　敬具

6　（S8・11・3）
岩手県和賀郡藤根村大字後藤

高橋峯次郎様

千葉県千葉市寒川にて

菅沼義平

一筆申上げます。皆様には御変りありませんですか。小兵も元キであります。去る廿七日は早九回の軍旗拝受記念祝典がありまして、迚も賑やかでございました。其晩グッスリ寝込んだ所非常呼集がありましてはね起きなければなりませんでした。

世一日は秋キ演習に出発、夜は寝づに襲撃、晝は眠くて困ります。今日は諸兵聯合演習終りて一日中滞在です。濱辺にて宿舎の軒下が海です。潮が干けるとアサリ貝などや蟹が出てゐます。中々気持のよい所でございます。明日から聯隊対抗で終れば茨城へ行きて師団対抗です。先づ

7（S8・11・7）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

千葉県中山丁滞在地

菅沼義平

前略

聯隊対抗は諸兵聯合に比して中々強演習でありました。夕方から拂撓戦まで行軍続け通しにて少しも知らぬ地を歩いてやってゐるのです。聯隊対抗は終了して明日からは旅団対抗であります。昨日一日雨にやられて困りました。中山町は相当よい町であります。

先づは擱筆致します。

8（S8・11・16）

岩手県和賀郡藤根村在郷軍人会藤根村分会長

高橋峯次郎様

東京市赤坂区一ツ木町

近ヱ歩兵第三聯隊MG五

菅沼義平

拝啓

愈々厳冷の候と相成りました。折柄分会長殿には如何御消光遊れて居りますか、御伺ひ致します。降って小兵も去る二週間に亘る秋キ演習中、諸兵聯合今師営対抗に至る間無事勤ム致し、去る十四日夕刻帰営致しました故、他事乍ら御安心被下度ございます。只今は営内生活□除隊気分が沸ってゐます。正夫君の入営は七五なさろである事を聞きました。　先づは近況報知迄

9（S8・12・13）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

近ホ三MG五

菅沼義平

其後は御無沙汰□□み打過ぎ誠に申訳ありませんでした。過日は義代志君が自分の所に面会に来た。浮心あるものを頂戴致しました。（欠）ありがたくあ（欠）に幾重にも御礼申上ます。直ぐ御礼致可きに例の怠けもの故と（欠）まして何とぞ御許し願ひます。

今は初年兵が入営して迚も賑かであります。

自分の隊には二十一名も入ったので何か何んだかたゞわれ〳〵兵隊ば

っかりです。寝台もぎっしりです。何も知らなくたゞまじめに働いてくれる初年兵は全く可愛い、気持がします。先づは

御礼まで　　敬具

10（S9・1・1）

岩手県和賀郡藤根村

帝國在郷軍人会藤根村分会長

高橋峯次郎様

謹賀新年

兵営の窓より遙かに御高堂の満幅を祈り

尚将来の厚誼を希ふ

昭和九年一月元旦

近衛歩兵第三聯隊機関銃隊

菅　沼　義　平

11（S9・2・27）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

東京近歩三機ノ五

菅沼義平

拝啓、一筆申上げます

其後御変りなくありますか。小兵も御蔭様にて何変りなく勉励致して居ります。

来る三月三日、聯隊は戦斗教練は第一期の検閲の為め、富士裾野滝ヶ原廠舎に出張するのであります。品川駅にて馬、兵器、兵を搭載出発して途中小田原駅下車して、箱根八里を越すのです。先づは

敬具

12（S9・4・28）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峰次郎様

東京第一衛戍戍病院第二外科西宿室

菅沼義平

拝啓

其後は思ひ掛けなき御無音に打過ぎまして、実に申訳ありませんでした。御赦し下さい。皆様には御変りありませんですか、御伺ひ致します。

昨日は郷里の新聞を御送り下さいまして、実にありがたく拝見致しました。小兵も相変らずですが、去る十七日剣術競技會の際、左手の示指を少々打撲しまして、痛みを感じました。其后次第にはれて来ましたので、医務室に行き診断してもらひ湿布なんかしましたが、経過よくなかったのです。そこで軍医の申すには少し長くなるから入院して来いとの事にてがっかりしました。廿一日入院、直ちに切開してもらひましたら、膿も出て来ました。爪を取りて、そこを切開したので、たゞの所より治りが遅い様な感じがします。何しろ大切な時の入院にて口惜しいのです。近衛兵であってこその大観兵式も出来ず、その上来る五月三日、千葉縣下志津出張も出来ず、又聯隊の瓦斯兵として銃隊より十二名特別教育を受けてゐましたが、それも少しやった許りで入院となり、実に口惜しいのです。此の出張が終れば二年兵は直ぐ除隊となるのです。自分は云ひかねますが、進級などは召束ない事だろうと思ひます。ほんとに

大切な時入院となって、幾らもがひたとて駄目であります。
先づこれにて筆を擱きます。御見大切になさいませ。
四月二十八日　義平
高橋先生様
御家内皆々様

13（S9・6・10）
岩手県和賀郡藤根村後藤
高橋峯次郎様
近歩三ノMG三班
菅沼義平

毎日天気よくあります。今執銃教練やってゐます。今日はパラチフス、チョウチフスの予防注射やった。午后から出てゐます。あすも午前ねてゐるのです。
忙しい故御無沙汰する事でありませう。　乱筆にて

14（S9・7・9）
岩手県和賀郡藤根村後藤
高橋峯次郎様
近ホ三MG
菅沼義平

拝啓長らくの間御無沙汰致しました。
先生初め御家内皆々様には頗る御健全の由、何より慶賀に堪へません。小兵も御蔭様を以て無事軍務に勉励致してゐますから、他事乍ら御安心被下さい。
先日は友次郎君が面会に来てくれて非常に面白くありました。菊池と三人で営内参観を致し、兵営内を喜んで見学して頂きました。殊にMGの特意とする銃砲廠厩等は細密に説明してやりました。又上海駐屯当時の話も沢山聞きまして、愉快に遊びました。それより里義君や清雄君の所にも寄りて行くと云って別れました。　敬具

15（S9・7・18）
岩手県和賀郡藤根村帝國在郷軍人会藤根村分会長
高橋峯次郎殿

暑中御伺
炎暑の折柄　御自愛専一に祈上候
昭和九年盛夏
二伸、孫作君の死亡、悲しみに堪へません。
近衛歩兵第三聯隊機関銃隊歩兵砲班
菅沼義平

16（S9・7・26）
岩手県和賀郡藤根村後藤
高橋峯次郎様
東京近ヱ歩兵第三聯隊
機関銃隊歩兵砲班
菅沼義平

拝啓

其后皆々様には御変りなく御働きの事と御察し申上げます。小兵も御蔭様を以て無事軍務に精励致して居りますから御安心下さい。扨て小兵は、去る七月二十五日附を以て、歩兵上等兵を命ぜられました。此の上は益々軍務に励み、大事な禁闕守衛の大任も恙なく果したい覺悟であります。

来るべき徴兵検査は好成績の事と御察し申上ます。何れ結果を御知らせ下さらん事を御願ひ致します。

誠事今回現役志願をする話ですが、何しろ宜しく御願ひ致します。

本年ハ気候思はしからずで稲の成長に相当の影響ある模様ですが、叔父様の家では如何でありますか、御伺ひ致します。

先日友次郎君が面会に来てくれた時は、何も御かまひもしなかったが、営内参観文はゆっくりとやって、色々説明もして非常に面白くありました。

御身大切になさいませ。

敬具

七月二十六日

菅沼義平

叔父上様

御家内皆々様

17（S9・8・5）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

東京近ヱ歩兵第三聯隊

機関銃隊歩兵砲班

菅沼義平

前略御免下さいませ。其後皆々様には御変りありませんですか。自分も御蔭様にて無事励んでゐますから、他事なれど御安心下さい。本年は気候不順にて、農作物特に稲作等は大打撃の事と察します。

本年の徴兵検査は定めし好成績の事と遠察申上ます。甚だ申兼ねますが、御報知を御願ひします。自分等聯隊は、来る十六日から習志野出張演習となります。自分等は来るべき秋季の特別大演習に大いに活躍すべく、今より身を鍛へてゐます。時節柄御身大切に。

八月五日

義平

高橋峯次郎様

外御家内皆々様

二伸

寫眞ハ風キ衛兵歩哨掛服ムの日、であります。

18（S9・8・10）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峰次郎様

東京近歩三MGノiA

菅沼義平

拝啓

先日は郷土の懐しき新聞を御送り下されまして、誠に有難く御礼致します。徴兵検査の結果、好成績を収めました事を御祝ひ申上げます。家の弟も合格せしとの事、小兵も満足の至りと存じます。当地の方へ入る兵隊もある由、これ又慶んでゐます。

去る七日の嵐にて、農作物は大打撃を受けし由、驚き入りました。丁度あの日は友次郎さんが面会に来てくれた日で、こちらは天気でした。

終

19 （S9・9・8）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

近歩三ノキ

義平

拝啓　長々の御無沙汰御赦し下さいませ。

伯父様を初め、御家内皆々様には御変りなく御過しの事と御察し申上ます。小兵も頗る健全にて毎日演習をしてゐます。

聯隊ハ七日午前二時出発をし、品川より御殿場駅まで汽車行軍にて富士瀧ヶ原の演習場に参りました。聯隊特別射撃及歩兵砲実弾射撃をやります。我等の誇りとする新兵キiAの威力を充分発揮することが出来るのです。

先づは気候不順の折、御体を大切になさいませ。

20 （S9・9・25）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

外皆々

近歩三ノキ

義平

一筆申上ます。

其後皆々様には御変りなく御暮しの事と御察し申上ます。小兵も頗る元気旺盛であります。

先日の台風にて御地ハ如何でありましたですか。当地ハ大した事とてもありませんでしたが、街路樹や塀等は倒れたり、看板などが飛んだりして面白くありました。丁度外出の日でしたが、相当騒ぎました。青訓の大演習もあった由、盛大なこであったらうと察します。

先づは皆様御身大切になさいませ。

21 （S9・10・4）

巌手県和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

近ヱ歩兵第三聯隊機関銃隊

菅沼義平

拝啓

先日ハ懐しき新聞を御送下さいまして誠に有難くありました。出張前日とて準備やらで取紛れ、御礼状も差上げずに甚だ相済みませんでした。去る青訓査閲ハ非常なる優秀成績を収められし由、悦に堪へません。先生を初め指導員各位及生徒諸氏の自覺努力の賜と深く感謝致します。

又壮丁抽籤ノ結果も大多数現役兵として入営される由、小兵としても同慶の胸高鳴る次第です。又愚弟も志願兵として入る事、何分に御指導御願ひ致します。御祝詞迄

22 （S9・11・1）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峰次郎様

近歩三歩兵砲中附

義平〆

其後ハ御無音御許し下さいませ。秋キ及特別大演習の為め三十日午前

二時R出発し、品川―神奈川県平塚まで汽車行、それより小田原方向ニ戦備行軍、諸兵聯合、小田原ニ宿営、三十一日二宮方向に我等ハ戦斗退却しつゝ、午后四時中郡五□安村着、同地滞在、一日休み、二日出発の予定、各所にて御優待になり恐縮の外ありません。雨も降らず演習日和です。太平洋を眺めつゝ、行軍も又興味が深いのです。御便にて。

23　（S9・11・7）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

大演習地区　近歩三歩兵砲中隊

義平

御家内皆々様御変りありませんですか。秋キ演習神奈川県二宮海岸滞在以来、益々元キ旺盛です。去る五日ハ聯隊抗（ママ）を了りて滞在（東京府西多摩郡霞村）当村在郷軍人の活動には全く驚き入りました。馬撃場などには夜通しに勤ム致してくれ、又分会及處女会員は戸別訪問して慰問品を贈られ、実に感涙にむせぶのみ。今朝（六日）三時、宿に別れを告げ、旅団対抗演習に埼玉県に侵入。ヒキ郡高崎村にて状況申す

24　（S9・11・18）

巌手県和賀郡藤根村後藤

高橋峰次郎様

東京市赤坂区一ツ木町

近衛歩兵第三聯隊機関銃隊歩兵砲班

菅沼義平

其後御変りありませんですか。小兵ハ頗る元キです。来る廿五日ハ軍旗祭で待遠しいのです。

ラッパの件ですが、九段に行って聞いたら、新品で六円位、中古で三、四円です。数ハ幾ら位ですか。御知らせ下さいませ。眞友ハ有難く拝見しました。

高橋徳三郎曹長殿が陸士へ入校の由、早速其の節（十二月一日）ハ面会する考へです。　用件のみ。早々

25　（S9・11・24）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

東京赤坂区近衛歩兵第三聯隊機関銃隊

菅沼義平

御芳墨拝見致しました。

喇叭の件、新品一ケ。中古一ケ、斗金拾円で二個を買って行きます。喇叭手に吹いて見てもらひます。代金ハ表記宛に御送金願ひます。

愈々二週間となりました。今になって別れを思へば自分の家を離れる様な気分が致します。廿五日は軍旗拝受記念祝典で、大賑ひです。

先づは御返事まで。

外出の日がなくなります故、至急願ひます。

26　（S9・11・28）

岩手県和賀郡藤根村在郷軍人分会

高橋峯次郎様

近歩三ノキ

義平

用件のみ申上ます。
喇叭代金拾円也、書留便を廿八日付頂きました。御安心下さいませ。
高橋徳三郎曹長殿、一日入校との事、面会に行きたい考へです。
東京の地も寒さ加はり、朝夕縮こまりたくなるのです。小銃隊の間稽古には（剣術）全く感謝させられます。最後まで奉公します。
御返事まで。　早々

27（S9・12・3）
巌手県和賀郡藤根村後藤
在郷軍人会藤根村分会長
高橋峯次郎殿

謹啓　時下初冬の候、高堂益々御清榮一段奉賀候。扨て拝別以来兎角御無沙汰勝なるにも拘らず、種々御厚情に預り、難有奉深謝候。茲に一年有半の平営生活近衛の重責たる禁闕守衛の大任を無事全ふする事を得、愈々来る十二月十日を以て帰休除隊を命ぜられ候、之れ偏に郷黨諸賢の御後援の賜と深く奉感謝候。
何れ帰郷の上、親しく御禮申上へく候へ共、今懐しき兵営を去るに臨んで、不取敢御挨拶を兼ね御通知申上候。　頓首

昭和九年十二月　日
近衛歩兵第三聯隊機関銃隊
菅沼義平

二伸
喇叭ハ二日発送致シマシタ

28（年月日不詳）
岩手縣和賀郡藤根村後藤
高橋峯次郎様
東京近ヱ歩兵第三ノmg
菅沼義平

其後ハ御変りありませんか。気候の方は如何ですか。当地ハ先頃よりヂリ〳〵暑くなりまして、風は無し蒸される様な始末です。聯隊ハ二十五日まで十日間習志野にて第三期検閲及戦斗射撃の為め出張致しました。行軍は夜行軍でした。自分ハR東部取締の為め前の日に汽車行で以てきて準備しました。早々

29（年月日不詳）
岩手縣和賀郡藤根村
高橋峯次郎様
東京近歩三ノMG五
菅沼義平

御ぶさた許して下さい。去る八月三日、冨士瀧ヶ原廠舎に来たのです。五日に冨士登山しました。頂上に着したら翌朝で（八合目二一泊）まるで冬の様な寒さであります。午前十一時帰廠致しました。先づは御身大切に。

30（年月日不詳）
岩手縣和賀郡藤根村
高橋峰次郎殿
大演習地配達（朱書）
歩兵第三十一聯隊第三十一隊歩兵砲
菅沼義平

拝啓　時下秋雨の候、相来申候処、皆々様には如何御過し申候哉、御伺申上候。降而小兵其後勇躍演習参加致し而三大隊ハ去る十八日午前四時屯営出発致候。青森に一泊して朝、青函連絡船を以って北海道上陸、函館本線を以って墨松内ニ十九日午前五時半到着滞在致居り候。今迄は輸送ニて面白く過し実に愉快で、船にも酔はず、道、山野の景色も殿下を奉載する國宝聯隊を歓迎するかの様。

右御近況報知迄。　　敬具

31　（年月日不詳）

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎殿

拝啓　時下秋冷之候、益々御清栄の段奉慶賀候。□者小兵渡北以来御蔭様を以て第二期師団□□敵演習も恙なく終了致候。十月に入れば愈々最も光栄ある処の特別大演習ニ参加致可候。現在大演習集合ノ為、苦小牧ニ三泊滞在休養中ニ御座候。右近況報知迄　　敬具

大演習地の苫小牧町にて

菅沼義平

32　（年月日不詳）

岩手縣和賀郡藤根村在郷軍人分会長

高橋峯次郎殿

東京市近衛歩兵第聯隊ＭＧ

菅沼義平

其後長らく御無沙汰致しました。叔母様には御死去の由、御悔み申上ます。あまり突然の事にて、三日程病まれた由、老年とは云へ御痛ましき次第であります。

聯隊にては去る二十七日、第二中隊（四班）に法定十種の中の流行性脳背髄膜炎類似症発生し、外出も出来ず御守衛にも行けず、尚発生中隊は毎日午前十時ゟ健康診断等にて、又二中隊の面会所も天幕にて出来てゐます。先づは。

33　（Ｓ16・8か）

大日本岩手縣和賀郡藤根村後藤

高橋峰次郎様

満洲國東安省虎林縣虎林

満洲第五二四四部隊嶋谷隊

菅沼義平

前略

愈々残暑の候となりました。皆々様にハ御変りなく村の為め、国家の為め、御働きの事と推察いたします。

小生出発以来一路恙なく任地に到着いたし、表記部隊の命名となりました。

青年学校も我等出発以来、新進なる指導員諸氏を迎へし事と思ひます。

盛岡にゐる時は色々と御厚情に預りました。

右御一報まで。　　敬具

34　（Ｓ□・9・21）

岩手県和賀郡藤根村

高橋峰次郎殿

満洲國東安省虎頭軍治郵便所気付

満洲城第五二四四部隊嶋谷隊

菅沼義平

前略

皆様には御変りありませんですか。私も元気にて働いて居ります。村でハもう稲刈でありませう。青年学校方面も御多忙で嘸や御骨折の事と思ひます。

来る可き査閲にハ活気ある教授訓練の下、優秀なる成績を獲得されんことを祈ります。大陸にも秋は訪れ、秋草の花も綺麗に咲いてゐます。某国の汽車も煙を吐いて走ってゐます。ハガキしか出されないことになってゐる　やってゐることも〇〇　先づは

35　（S□・9・26）

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎様

牡丹江第十九軍事郵便所気付

満洲城第五二四四部隊嶋谷隊

菅沼義平

九月二十六日

前略御免下さい

叔父上様には足を痛められし由、何んなにか御不自由の事かと遠察いたして居ります。其後の御経過は如何でありますか、御伺ひ申上ます。

私事も益々元気にて軍務に精励いたして居りますれば、他事ながら御安心下さい。

稲刈も大分進行したこと、思って書いてゐます。去年に比べて百姓達も頬笑んでゐるでせう。寒さ加はる折柄、早く癒る様に祈り上げます。

36　（S□・9・29）

封筒なし

拝啓

先生には長らくの間御無沙汰いたしました。悪しからず御許し下（さい）。足を痛められし由（欠）たが御癒りになったでせうか、御伺ひ致します。

村では種々な仕事の為め、戦争完遂の為め、一丸となって、御奮励の（欠）を遠察いたしてゐます。今年は稲作も大（欠）との事、これ又邦家のためにも此の上な（欠）はせと思ひます。

降而、私事て御（欠）を以って無事軍務に精励いたし居ります（欠）銃後の皆様の熱誠なる御支援の賜と（欠）謝いたして居ります。高橋一郎君の村（欠）だ執行しませんですか。又、菊池林□君、高橋（欠）大君、柏木慶作君の諸英霊に対しては、（欠）心より哀悼の意を表します。一旦村を離れてきてゐ（欠）と、村のニュースなど嬉しいものを感じさせ（欠）す。

我等の最も愛する眞友は、その後益々内容を充実なされまして、前線の将兵をどれ丈励ましてくれて戦斗力に影（欠）を及ぼすことかと感謝に不堪へません。就き（欠）は同封の御金は甚だ些少なものですけど、眞（欠）行の為に御使用下されますならば、幸甚（欠）であります。

時節柄御身大切に（欠）御盡力あらんことを。

敬具

九月二十九日

菅沼義平

高橋峯次（郎）

37　（年月日不詳）

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎様

満洲國東安省虎頭軍事郵便所気付

満洲城第五二四四部隊嶋谷隊
菅沼義平

前略御免下さい

其後、先生には御変りありませんですか。降小生ら至極元気で軍務に励んでゐます。村では旧お盆も過ぎましたね。今年の招魂祭ハ何うでしたらう？青年学校の方も御多忙の事でありませう。清徳君善一君等も非常に骨が折れることでありませう。合同祝祭や指導員研究会、嘸や優秀な成績を飾ったこと、察してゐます。来るべき教練査閲ハ優秀な成績を以て過される様、遙か比満の地から御祈りいたします。ハガキしか許されぬ故、悪しからず。

38　（S17・1・4）

岩手縣和賀郡藤根村
高橋峯次郎様
満洲國牡丹江第十九軍事郵便所気付
満洲城第五二四四部隊嶋谷隊
菅沼義平

十億の赤誠以って、昭和の十七年は朗らかに明けました。青年學校の教授訓練、軍事的にブチ込んで下さい。指導員諸氏や先生方によろしく。今後一寸御便り出し兼ねます。

39　（S17・2・18）

岩手縣和賀郡藤根青年學校
高橋峯次郎殿
満洲國牡丹江第二十軍事郵便所気付
満洲城第五二四四部隊嶋谷隊
菅沼義平

二月十八日

絶対完備を誇る新嘉城陥落を御祝申上ます。皇軍の向ふ所、いかな全域鐵壁と虻も降せずには置かぬのであります。我等も北辺の守りを彌々鞏固ならしめ、銃後戦線の皆様の期待に副ひたき決意であります。

指導員諸氏、生徒の諸君へもよろしく。

40　（S17・3・15）

岩手縣和賀郡藤根村
高橋峯次郎様
満洲國牡丹江第二〇軍事郵便所気付
満洲城五二四四部隊嶋谷隊
菅沼義平

三月十五日

叔父上様には其後御壮健にて銃後戦線にて御活躍のこと、遠察いたします。私も豆です。而し多田君は病床生活の己むなきにいたりました。御慰問品を御送付なされし由、何んぼ首を長くしても仲々届きません。

我等の仲間には、叔父上様の様な光る連中も相当頑張ってゐます。此の間からは任ムの重大なるを覺て参りました。青校指導員諸氏も生業御多忙中、ほんとに御苦労様に存じます。先生より御傳声の程を。「他の隊」弟の副官メンバイ〈〈

41　（S□・3・18）

岩手縣和賀郡藤根村後藤

高橋スエ様

滿洲國牡丹江第二〇軍事郵便所気付

滿洲城第五二四四部隊嶋谷隊

菅沼義平

三月十八日

今日は叔母上様より御心込めなされた御慰問品を頂き、ほんとに〳〵有難く御礼申上ます。早速晩には村の者集り常會を開き、内の方の話に花を咲かせて美味しく頂きました。少し宛戦友達へも分けてやり、大いに喜ばれました。

滿洲の此の頃はとても暖かになって、木々も芽を出したい様に見えます。道路などすっかり渇き気持ちよくあります。内地もそろ〳〵忙しくなってきたでせう。私は苗代の事を思出す時、こゝでは苗代がなくてよいなど、戦友同志と笑ふこともあります。右御礼まで。

42 （S17・5・2）

巌手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎殿

滿洲國吉林省公主嶺

滿洲第二四八部隊高橋隊ノ二

菅沼義平

五月二日

長々御無音に打過ぎ誠に申訳ありませんでした。其後叔父上様を初め御家内の皆々様にハ如何御過しあらせられますか、御伺ひいたします。内の方でも愈々多忙となって猫の手も欲しい秋でありませう。滿洲も今初めて木の葉緑色となってきた許りです。小生事不本意乍ら当地にて任務遂行中であります。でも、すっかり元気し居りますれば他事乍ら御放念被下度。

右御無沙汰御詫び旁々御一報まで。

敬具

43 （S17・6・16）

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎殿

滿洲國吉林省公主岑

滿洲第二四八部隊高橋隊ノ二

菅沼義平　6・16

其後叔父上様を初め御家内皆々様には御変りも御座いませんですか、御伺ひいたします。降而私事至極元気にて任務に勉励致し居ります故、乍他事御休心被下さい。近頃は何等健康体と変りない様になりました。村議選も新顔が沢山出来たでせう。壮丁検査も好成績であったこと、察します。甲幾名であったでせうか？多田君とう〳〵行ったが其後村へはまだでせうか。小生隊復帰は一寸間があること、思ひます。多忙な田植も終了し、のんびりした端午節句であったですね。当地は昼の暑さったらまるで炎られる様で、内地の土用の暑さと同様であります。飛行機も朝早くから夜遅くまで猛訓練で僕等が見て居て実に感謝に堪へない気持です。又、時々慰問等もあり、面白い公園附近の散歩などもあります。先づは。

44 （S17・7・19）

岩手縣和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎殿

滿洲國錦州省第八軍事郵便所気付

満洲第二部隊桜田隊中嶋隊
菅沼義平
七月十九日

愈々酷暑の候となりました折柄叔父上様を初め、御家内皆々様には御変りもなく御過しでありますか、御伺ひ致します。降而私も益々元気にて任務に邁進致して居ります故、乍他事御安心下さいませ。今年の壮丁検査は優秀な成績の由、慶賀に不堪ず、稲作も良好の様な話、今年こそ豊年であってくれゝばと祈ってゐます。当地も二ヶ月余りも雨がなかったが、近頃降ったので畑の作物も生き返った様に元気付いてゐます。今海水浴にて大賑ひ、私も昨日行き、眞黒になった。

45　（S17・8・30）
岩手県和賀郡藤根村
高橋峯次郎殿
満洲國錦州省錦州第八軍事郵便（所）気付
満洲第二部隊若杉隊中嶋隊
菅沼義平

先日は嬉しき眞友を御送付下され有難く御礼申上ます。前線にある者は、何んなに雀躍して見たことかと思ひます。点呼の成績は非常に優秀な由、何よりと慶んでゐます。校長先生も異動ありましたね。それに役場（欠）満期兵も優秀な成績にて帰郷の事（欠）次第です。皆先生御盡力の賜と深く感謝（いたし）て居ります。
私も今少しにて東安の方へ（欠）御奉公の日近きこと、思ってゐます。
時節柄、御自愛専一になされる様祈り上（欠）、御家内皆々様にもよろしく御傳へ下さい。

46　（S17）
岩手縣和賀郡藤根村
高橋峯次郎殿
満洲國牡丹江第十九軍事郵便所気付
満洲第五二四四部隊鈴木（古）隊
菅沼義平

拝啓
時下酷寒の候、皆々様益々御健勝の段、大慶に存じ候。降而小兵事御蔭様を以て無事頑健にて軍務に精励致し居り候へば、乍他事御放念ヒ下度候。
御地は丁度御七昼夜の最中と存じ候。我々は銃後の赤誠なる御奮斗に感激し、勇躍北辺の護りにつき大東亜戦争完遂の為、邁進致居り候。尚小原千葉の両氏も元気にて御奉公致居り候。
右乱筆を以って近況御報知迄。
敬具

47　（S18）
岩手縣和賀郡藤根村後藤
高橋峯次郎様
満洲牡丹江第二〇軍事郵便所気付
満洲城第五二四四部隊　嶋谷隊
菅沼義平

其後は長らく御無沙汰いたしました。何とぞ悪しからず、平に御赦し被下度。御家内皆々様には定めし御壮健にて、大東亜戦争の眞只中、銃後戦線異状なしと鉄石の如き決意の下、凛然として御活躍の様、目のあたり彷彿たるものありまして、我等感激いたし、勇往として御奉公出来

るのであります。

尚フサ子様からは、度々御手紙頂き、誠に有難く御礼申上ます。御蔭様を以って、去る一月十五日兵長に進級いたしました。満洲は寒さ今たけなはです。木々は花盛んの様です。防寒服も重く、益々奮励いたして居ます。青年学校の職員生徒によろしく御傳言下さい。先づは。

48　（年月日不詳）

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎様

牡丹江第十九軍事郵便所気付

満洲城第五二四四部隊嶋谷隊

菅沼義平

拝啓

愈々初秋の候と相成候処、皆々様には如何御消光あられ候や、御伺ひ申上候。降而小生事御蔭様を以って元気にて復帰いたし軍務に精励いたし居り候へば乍他事御放念下され度御座候。

今迄は色々と御心配を相掛け申し誠に恐縮の至りに存知奉り候。

御地は豊穣の秋とて非常に御多忙に渉らせられ活氣ある模様の事と遠察致居り候。

決戦下の今日呉々も御体に氣を付けられ、益々御奮斗の程祈り上候。

敬具

49　（年月日不詳）

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎殿

満洲國牡丹江第十九軍事郵便所気付

満洲城第五二四四部隊嶋谷隊

菅沼義平

叔父上様にはその後長らくの間御無沙汰いたしました。御家内の皆々様も嘸や御変りなく御過しの事と思ひます。今日は嬉しい「眞友」を御送り下さいまして非常に珍しく拝見さして戴きました。誌上の皆様の動静が手にとる様に判りました。

叔母様も大した御状納をなさいましたね。その精神で我等も銃後も此の大事業完遂の為め頑張りませう。

向寒の折、御自愛専一に祈り上げます。

50　（年月日不詳）

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎殿

満洲國牡丹江第二十軍事郵便所気付

満洲城第五二四四部隊嶋谷隊

菅沼義平

新聞有難く拝見いたしました。生存者論行も出てゐました。助役さんも再送との事、婦人団体も統合されて、銃後に益々完璧なる由、心置きなく軍務に精励するを得ることを謝します。分会査閲も優秀なる成績にて了りし由、慶賀に堪へません。

青年学校の生徒諸君へもよろしくと申して下さい。封筒はこちらはブシン。不一

51　（年月日不詳）

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎殿
牡丹江第十九軍事郵便所気付
滿洲城第五二四四部隊嶋谷隊
菅沼義平

拝啓

山簾にひゞく鹿の聲も哀はれに、秋の去るを傳へ居り候。折柄先生には定めし御壮健にて銃後戦線の為め御活躍の御事と遠察申上候。猫の手も借りたき取入も大方終りし事と思考致し居り候。近年になき豊作との事、農民達も笑顔の様が目に浮び申□候。扨て先日送付せし筈の（十月一日附）眞友発行資金は御届きに相直り□□や。御迷惑ながら御一報ヒ下度願上候。右乱筆を以って御願迄。　敬具

52　（年月日不詳）
岩手縣和賀郡藤根村後藤
峯次郎様方
高橋スエ様
滿洲國牡丹江第十九軍事郵便所気付
滿洲城第五二四四部隊　嶋谷隊
菅沼義平

其後叔母上様には御変りありませんか、御伺ひいたします。降而私も至極元気にて軍務に精励いたし居ります故、乍他事御安心下さい。

大東亜戦争を遂行すべき昭和十七年の新春は朗らかに訪れて参りました。

定めし銃後の皆様の御勤めは御多忙の事と遠します。太平洋に於ける海軍の大戦果は大したものですね。それにつけても友次郎様には如何御勤めでありますか、御伺ひいたします。寒さはげしき折柄、御身に気をつけられる様、留守中はよろしく。

53　（年月日不詳）
岩手縣和賀郡藤根村
高橋峯次郎様
滿洲國牡丹江第二〇軍治郵便所気付
滿洲城第五二四四部隊嶋谷隊
菅沼義平

随分長らく御無沙汰いたしました。

御元気にてペタルを踏んで村の為め、青年指導の為め御奔走なされる姿が胸に浮かんで参ります。私も元気にて務めてゐます。

去る青年學校査閲は優秀なる成績を収められし由、ほんとにうれしく感じました。先生を初め、職員御一同様方の御盡力の段は感謝いたします。横川目の指導員方は新しい人達に変った筈でしたね。

北満の地も寒さ愈々本格的となってきました。何も詳しいことも、又封書も止められてゐます。御諒承下さい。御歳暮も目睫に迫まってきました。御元気にて御越年あらんことを祈ります。　敬具

54　（S□・8・16）
大日本岩手縣和賀郡藤根村
高橋峯次郎様
菅沼義平
八月十六日

前略

先生には御変りありませんか。小生八月十六日、無事誠のソバに任地として着きました。村の人達や青年学校によろしく御願いたします。

55（S4・7・30）

和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

外皆々様

盛岡市内丸岩手病院一四六

菅沼義平

此の酷い暑さに皆様には御変り無く働いて居りますか、お伺致します。

私は早くから鼻が悪いと思って居りましたが、思ひきって盛岡の病院に来て診てもらひましたら、蓄膿症との事で早速十八日に入院して十九日に一回、一週間目に又一回手術してもらひました。今では大分愈りました。お婆さんが付添に来て居ります。

今野先生はやっぱり同病院に居ましたが二三日前に旅館に移りました。

56（S12・3・9）

岩手県和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎様

大阪にて

菅沼義平

出発の際ハ有難く御礼申上升。元気で見物してゐます。

57（S14・12・7）

岩手縣和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎殿

日立市天神森二丁目六〇〇

小林巳之吉様方

菅沼義平

拝啓

厳寒之候、先生には御変りなく銃後の鉄壁の為め、青年学校の為め御盡力の事と推察申上ます。小生も元気にて働いて居ります故、御放念ヒ下度。

青年学校の方に対し、甚だ不本意な行動とは知りながら、慾心の為めには如何ともするあたはず、で、何とぞ御赦し被下度。当地ハ毎日天気続きでポカ〳〵です。丁度春先の様です。時節柄御身大切に。　敬具

58（S15・1・1）

岩手縣和賀郡藤根村後藤

高橋峯次郎殿

茨城縣日立市芝内

天神森小林巳ノ吉様方

菅沼義平

謹賀新年

聖戦第四の新春を寿き奉り

益々、後奮斗を祈る

昭和十五年　元旦

59　（S15・2・18）

和賀郡藤根村
高橋峯次郎様
釜石市松原町
第五親和寮
菅沼義平

拝啓

出発以来全員無事職務に邁進降てゐます。寒気も村よりハ弛いやうです。土煙が空高く飛び、流石の工業地帯も埃だらけであります。我等ハ眼だけ白黒して南洋土人を思はせます。

生徒も一名の事故者もなく、規律ある軍隊生活の形式にて過してゐます。

右近況報知まで。　敬具

60　（S□・3・19）

岩手縣和賀郡藤根村後藤
高橋峯次郎様
□会市東部七〇部隊友永隊（き）
菅沼義平

前略御免下さい。

先日は種々御世話様に相成り、且つ御鞭撻下されましたる段、厚く御礼申上ます。御陰様にて元気にて軍務に勉励いたし居りますれば、乍他事御放念被下度。

重大なる時局で叔父上様の御壮健を祈り、青壮年軍事指導の為め益々御盡力あらんことを祈り上げます。

青年學校の皆様によろしく御願申上ます。　敬具

（国立歴史民俗博物館民俗研究部）

（二〇〇二年三月三〇日受理、二〇〇二年六月二八日審査終了）

Records and Memories of the Life and Death of the Farmer-soldiers: Examples from Two Soldiers in Kitakami City

SEKIZAWA Mayumi

With regard to letters written by soldiers, until recently the emphasis was on listening to the voice of the soldier, or author of the letter, and little attention was paid to the voices of those receiving the letter. This paper attempts to show, from the point of view of folklore research, how the families of soldiers understood and accepted the mass abnormal deaths of the soldiers dying in battle or from disease contacted at the front, as the war situation expanded from the Chinese-Japanese War to the Asia-Pacific War. To this end, the paper looks at the letters of two farmer-soldiers from Waga Town in Waga County, Iwate Prefecture (present-day Kitakami City), classifying and analyzing from the three separate aspects of documentation: records (letters), memories and oral accounts (interviews), objects (mortuaries and gravestones and other objects representing the dead). As a result, four issues are discussed. First, one notable feature of the letters sent by the two farmer-soldiers to their families was the fact that they did not discuss the actual situation at the battlefront but rather kept referring to the soldiers' homes, revealing how, even though the soldiers' physical bodies were at the battlefront, their minds were with their families at home. The act of sending letters was, for the soldiers, a way of signaling that they were still alive, just as the act of receiving the letters conveyed this information to the families. Second, such deaths from fighting and from disease contacted at the front were, for the traditional Japanese farming society, a first-time experience. Although death announcements were published in the bulletins and although village and family funerals hastily carried out, the families could not immediately accept the fact that their loved ones were dead and wives felt compelled to make investigations on their own to confirm their husbands' death. Third, special attention was given to the motivation behind the construction of graves for soldiers killed in battle or by disease at the front. Analysis indicates that building a grave was one way of accepting a husband's death, and that the grave served as the mechanism for severing and joining together the living and the dead. The fourth issue concerns the importance of objects representing the dead and of memorial services such as "kuyo," "irei," and "tsuito." The traditional ceremony to mourn the dead is "kuyo" in the case of a normal death and "irei" in the case of an abnormal death. When mourning for a dead person without bringing religious aspects into the picture, "tsuito" would be the appropriate the ceremony. Naturally, these three types of ceremonies have different meanings and functions and each follows its own vector in its placement of the deceased: the "kuyo" lead the deceased to attain of Buddhahood (enter Nirvana), the "irei" leads to deification of the deceased, and the "tsuito" demonstrates that the deceased retains his dignity in death. It is characteristic of objects representing those killed in battle and dead from diseases contracted at the front as well as the appropriate ceremonies to be multi-layered both in terms of space and religion.